



天竺行路次所見  
北畠道龍師著述  
三

ル 2  
2019  
3上





西川 2  
2019  
3止



北畠道龍師  
天竺行路次所見卷三

北畠道龍師口述

門人

西河偏稱  
長岡洗心  
筆受

伊太利國の「プリンジ」港より印度に發を  
十月二十五日午前第四時「プリンジ」港より「モン  
ゴリ」號の英艦に投じて印度に發航を此の日天氣  
牢晴些少の風波も無く海上宛も一面の砥よりも尚  
不平易おして左の方より希臘の群山遙くは我れと  
揖をるが如く右の方より伊國の沿岸近く我れを戀  
ふが如く我れとても亦さ久しく住み馴れ歐洲を是



む坐よ別と惜む心の切なる死んや去りとてを艦の  
行くこと速りなれど午後第五時頃より希臘伊太利  
の山々も淡乎たる一黛の雲煙と化し殆んど将さよ  
中海に至らんとする也嗚呼我れ曾て本邦を發して  
より以來今日程ど滿腔の爽快を領せしことを之れ  
死き也如何んと多き我れ世界歴檢の事業ハ既よ  
上り終りて唯だ是れ此の印度行の一つと缺く而已  
然して此の行たるや我が邦建國以來能く之れを果  
し得たる者素門中未だ一人も是れ有らざる也然る  
と我れ一度印度入て先づ佛尊の墓蹟を偵尋し及

び佛后遺教の轉次と詳明して我が佛教改正の備原  
ふも致し度き素志ありしが今日此の行に就て此の  
素志を果とさんとする豈に滿腔の爽快ハ非ざるを  
得んや

二十六日今日も亦と天氣宇晴ふして右の方より伊  
國の連山ハ既よ遠く煙化し去りたれども左の方よ  
希臘の群山ハ尚や薄く一帶の黛の如く悠々たり  
二十七日今日ハ希臘の薄黛も全く消し去て四望雲  
涯中海茫茫たり  
二十八日午前第九時「ポートサイド」港に著る



二十九日此の八九兩日間は世界有名なる「シユエツ」  
 カナールの八十八里(英の「マイル」)の堀り切りを通り  
 抜けて三十日午前第八時頃「シユエツ」港に到着した  
 り同日午前第十一時同港を發し是より亞刺伯海  
 路に懸り右に埃土左に亞刺伯國を眺顧して行くこ  
 と四晝夜なり  
 十一月四日朝第四時遂に「アデン」港に達したり  
 五日午前第五時同港を發して之を直線より前に進  
 めて亞細亞の新和蘭の方へ行く也然るを之れを左  
 へ轉じて印度海に浮ぶ也「カビテイ」云く此の海は

恒に平易にして激浪を起さざること先づと云へども炎  
 熱の苦き恒に此の如き也と即今十一月五日ふ  
 て其の暑氣の太どき我が日本の大暑よりも尚不  
 甚どき「單衣」にして尚不暑「」を感ゆる也是より  
 東北の隅に針路を定めて行くこと七晝夜にして同  
 く十一日午前第九時頃西印度の網買港に達し「アデ  
 レツ」云ふ西洋形の旅宿に投宿せる也  
 印度略史  
 抑も印度の邦たるや「ダライ」エツキス」とて三角形の  
 邦にして其の國尖ハ南の方た赤道の北緯八度より



起りて其の國尾ハ北の方た三十四度よ至て止む也  
 (此の長さ地理家皆云く六千里ありと)然して其の  
 國尾ハ西と東に張り出し(此の濶さ地理家或ハ云く  
 六千里ありと)北ハ西藏國と喜馬拉山脈を以て之を  
 界して其の國尖たる南よ走る程尖りて宛も埃土の  
 「ピラミート」の尖の如くよして印度洋に突出せる也  
 又た其の東ハ旁葛刺洋を中よして其の洋東に緬甸  
 及び「ミラア」等の邦あり又た其の西ハ印度洋を中よ  
 して「ベリウスタニス」「アブガニスタン」及び亞刺伯等  
 の邦あり然して此の印度の大初と云へバ「シリツセ

ル(萬國史を書きたる人)及び「オルデンプル」(印度史  
 を書きたる人)等云く原と「アルト、ヤール」(上古代)の昔  
 一印度草莽の時「ホフ、アジア」(高地)の亞細亞と云ふこ  
 と即ち蒙古及び「カウカジーセン」等の人民が水草を  
 追ふて段々西に遂に喜馬拉山の西北の凹より北  
 印度に入り彼の有名なる鉛絶斯(此の大河ハ其の水  
 源西藏より出で、印度を横切りふして西より東印  
 度の甲谷陀府を経て旁葛刺洋に入る也)と温都斯(此  
 の大河ハ其の水源喜馬拉山中より出で、西印度と  
 皮路直坦との間だを経て西印度洋に入る也)との二大



河の有るを見て衆欣然として云く此の如き二大河  
の在る有るを以て大いよ邦を可きよ足る也とて其  
れより堤よ草の殖つたる如く先づ此の二大河は沿  
ふてアルメリヒと段々よウオヌング(住居)を開き遂  
は此の地を画して五印度と爲さし至りし也「オルデ  
ンブルヒ」氏云く此の印度人の大原を云へば「ホフ、ア  
ジア」人が鉛絶斯河の邊へ入り來り此の邦を爲せし  
其の上古ハ我々の邦は残りある所の印度の古詩「  
グウエダ」と云ふ詩は依て見ると何れ丈け古きこと  
、云ふことハ分らぬ故は印度人は於ても其の我が

邦の大原を忘れしることハ即ち希臘人や及び伊太  
利人の我が邦の大原ハ何所ら興りしやと忘れし  
如く忘まさり然るふ「ウエダ」の詩は依て見ると原と  
「ホフ、アジア」人の印度へ入り込みしや其の法律も死  
き黒き人民を殺したり追ふたり又た属せ令めたり  
して温都斯河と鉛絶斯河の邊へ來りし其の中鉛絶  
斯河と「ヤム」河の相ひ合せし所へ來りし「アンガ」マ  
カダ「ピラハ」カツシ「エサラ」等の人種が東印度の方へ出り  
けし者と見へる也然るは他の邦の人種ハ散々し印  
度へ入り込みしなれども「アリア」人の如きハ一塊と



なりて宛も大濤の来る如く入り込み先づ温都斯  
の河邊なる「ベンチャフ」(印度の入り口)と云ふ邦は  
住み也此の人種は外りの人種と違ふて最も大なる  
ある文明を以て来り也如何となれば此の人種が  
彼の有名なる「リグウエダ」の詩を制作したる人なれ  
ば也然して此の人種が東南鉛絶斯の方た「ヤムナ」河  
の合をる邊に進んで是より於て「ブラマ」聖人の邦と云  
ふ書と及び「ブラマ」百道言と云ふ書を制作さきたり  
其の中々の規則書を云く凡そ地球上に生れたる人  
たる者ハ此の「ブラマ」子にのら修身の教を受

ねばならぬと定めらきたり是れ此の「ブラマ」教が他  
日種々「ペツシイスモス」「ナスケタシ」「ナスケタス」「アス  
ケチツク」「ゾフェイスチツク」等の種類あり今之れを爰  
小説明する小違あらざる也は分りきて大ひは印度  
の文明を争わ令めとりと(以上ハ「オルデングル」氏  
の印度史に云ふ所なり)龍云く是れ此の「ブラマ」教が  
る者の釋尊出誕前に至るまでハ既九十五種と分  
れて是れ此の九十五種が亦に分れて二となる一ハ  
「イデアールイスモス」の有の見の部(數論「ブラマ」が人  
と世界を二十五諦に分けて立つ即ち金七十論あり)



又と一ハ「マテリヤールイスモス」の「見の部」(勝論)「  
ラマ」が人と世界と十句に分けて立つ即ち十句義論  
ありふして此の二部互に「くつぜん」くつぜんとて争ふて少くも  
止むこと无り「とら」とら所釋尊此の間に出で、印度「ピロ」ピロ  
ソ「フイ」フイの真意を以て彼の有「ふ」ふ兩部の「ラマ」ラマを質  
正するは「何れ」何れも之れは答ふること能わざり「故」故は  
釋尊莞爾ふて云く然らハ則ち汝等が有と云ふ者も  
真有は非ざる可し又と汝等が无と云ふも真无は非  
ざる可しとて大ひは印度「ピロ」ピロソ「フイ」フイの真意を開  
顯せられ「所」所之れが為めは衆論の挫折せらるゝこ

と宛も枯れを拂ふが如く皆な悉く舌を結んで門下  
は伏を即ち其の最も巨擘なる者の舍利弗阿難(原と  
「ブラマ」ブラマの大家)の十大弟子等是れ也是は於て釋迦蓋  
世の卓見印度の「ピロ」ピロソ「フイ」フイと振然とて奥起大ひこ  
天下の文明を發揚せられざる也嗚呼印度文明の隆  
盛なる前後此の時を以て第一とせざる也是れ此の文  
明西の方埃土は行き羅甸希臘は亘り遂は歐洲を抜  
けて亞米利加は入る也是れ即ち「シリ」シリツセルの萬國  
史は云云せり又と其の東の方ハ亞細亞洲中を經過  
して支那は行き遂は我が日本を來る(開元釋教録等

天竺行路次第見 卷之三 七



よ云云せり實は世界文明の「アテラランド」(父の邦)と云ふことと云ふ可き也然るは物換り星移りて佛后五百年の頃佛徒の稍や怠りたるは中りて「ブ라마」教が復た再び興て印度の教権更ふ「ブ라마」徒の手は落ちし也其れより以來は印度の文明日々に頽壞し國力漸次は靡敗して殆ど之れを如何んともさるこ  
と元きは至らんとさるの間は乘して葡萄呀人佛蘭西人等も印度は入て各々其の爲は所あらんとさるの際一千七百五十六年の頃英國の有名ある「ヘスチング」氏の東印度の甲谷陀に入り同く有名ある英國

の「プライブ」氏の南印度の馬塔嘶ふ入り以來は英國の遠政手段又大はひふ行われんとさるは及てや佛人の如きは持ふ百方之れを妬害と云へど「ヘスチング」及び「クライブ」二氏の小節拘わるは足らざるの深謀偉略を以て抗する者ハ皆な之れを誅夷し服する者ハ悉く之れを拊循して今より百二三十年前哀れむ可し印度全國の版圖全く英國の所領となる也龍之れを考ふるは印度の爰は至る豈は獨り天子政府の先識先氣力に因る而已ならんや亦た是れ二億五千萬人の先識先氣力に因るや素とより也



嗟呼人民なる者亦た深く鑑を可き哉龍更あ「ロジツ、  
カリセ」因明論法を以て之れを云へば印度此の如く  
頽壞谷まると云へども英國此の如く遠政巧みなり  
と云へとも若し「スチング」及び「クライブ」の二氏微  
せば英國印度果して此の如き今日有ることを得ん  
や必竟兩國の今日有るは此の二氏の有るを以て也  
扱て英國の此の二氏ありて此の事の成りし之れを  
且く「ロジツ」カリセ「因明」立ち「小云へば」譬へば梅田の  
觀梅の如く梅も梅もして人非ず人も人ありて梅  
非非を然し其の梅非ざる人を以て人非ざる梅

と一つ「因明論」の不相離性不用く所不於て梅田の觀  
梅と云ふこととが出来る也然し人「客」が行く梅「主」が發  
ひたさ非ず梅が發ひて人が行て觀梅するなきは觀  
梅の大原も先を梅不在ること素よりの事實なる二  
氏と英國との間だ不於て其の遠政の成りしは此の  
二物の相ひ依る所不在りとも云へども全く二氏の  
カ不在る知る可き也傳ふ云く人を得れば其の事舉  
るとは此の謂歎嗟呼我が日本の將來大機不就ても  
つゞまり欲ひ者へ人なる哉  
印度不入るの路次



古昔唐の時代天竺てんぢくに至るいた其の路みち二つ有り一ハ即ち長安ちやんあんより龍西りゆうせいに出いで玉門陽関ぎよもんやうかんを経て流沙りゅうしゃを涉わたり南山なんざんに浴そふて西にしに葱嶺そうれいを越こへて北天竺きたんぢくに至る也支那な晋しんの代よに法顯ほつけん惠生ゑいせい等の北天竺きたんぢくに至る皆みな此の路みちに依よる也故ゆゑに唐書地理志たうしよに云いく安西あんせいの西關せいかんを出いづる數千里すうせんりありて疏勒そろくを渡わたりて葱嶺そうれいに至る等らうと云々又た一ハ長安ちやんあんより蜀しやくに入り雁越らんえつを過すきて東天竺とうたんぢくに至ると故ゆゑに唐書地理志たうしよに云いく西せいの方かた永昌故郡えいぢやうこくに至る六むと三百里さんぱうり又た怒江どかうを渡わたり諸葛亮城しよかくりやうぢやうに至り驃國境てうこくさうに入り今いまの緬甸びんま西せいの方かた黒山こくざんを渡わたり東天竺とうたんぢくに至る凡

そ六千里許むさうり有り等らうと然しかるに其の蜀しやくより羅越らえつを經へて行く路みちを述たしと云いふに甚おほくは險難けんなんなを又た龍西りゆうせい玉門ぎよもんに出いづるの路みちハ遠とほくと云いふにども少すくくは平易へいゐの故ゆゑに支那しなより天竺てんぢくに入るの數名すうな繁はんくと皆みな此の路みちに依よる也然しかし乍しばら是れ此の二路にろハ何なにも皆みなな險けん呀や遠とほ遠とほ小こくは智識ちしき豪膽ごうたん兼けん具ぐの人ひと小こ非ひざもは果はてて行くこと能あたらざる也然しかるに文明ぶんめいの今日こんにち小こ於おてハダンたんプぷシツしつプぷ蒸臘艦じやうらくかんの東行とうかう西趨せいそ所ところとして至いたらざるにこと死しきの秋あきなれを若わかし水路すいろうより行いくときハ甲谷かうこ陀た馬ま搭たつ嘶そ是れ等らうハ東印度とういन्द有名ゆうめいの港みなとなり及び鋼買かうばい是れこハ西



印度の有名なる港あり等の諸港何れの地からでも  
容易やすに至り得可うきふれども今日よてハ支那日本の  
間まに於てさるどの素門そもんも死しむばよハ又た印度よ  
至り得るも佛蹟ぶつせきの踪あとをみるに足る可うき者も死しむ唯た  
英人の土人を叱ち咤たする苛政かせいの太だ甚こぶしきを見るの  
外ほかに他死たき也嗟呼ああ印度の不幸ふしゆん何為なにぞ爰こゝに至れる實まこと  
小哀こあはれむ可うきの至りふ非ひずや  
日本の素門印度いんどうに入る果もして誰たれの矯矢きやうしとする  
日本開闢たいへん以來素門中印度いんどうに入らんとする者北畠道  
龍を以て第一矯矢とする甚こら然しからざる也如何いかんと

なまむ諸君しよくん知らずや平城天皇第二の皇子高岳親王  
弘仁元年の事小際して太子の位を退き同く十二年  
遂つひに削髮さくはつ染衣せんいして真如まにょと號し東寺とうじに行き道詮だうせんに從  
ふて三論さんろんの深義しんぎを叩たたき又た空海くうかいに就つて真言まごんの密意みつい  
を受け遂つひに阿闍梨あせりと成り貞觀四年しんくわん萬僧宗叡まんそうそうゑを隨ま  
て入唐にっぽんし支那しなに留りう筈はなすること殆んど二十年にじゅうねんに垂たん  
とむる也此の時中宗皇帝ちゆうしゆう廢佛はいぶつの後のちに佛敎ぶつこう頗すこる  
衰すい蕭せうし佛業ぶつごう亦また振ふるわす是を以て親王しんおう抽然ちゆうぜんとして自  
ら以為おもく如ごとかす直ただち印度いんどうに行て我が佛尊ぶつそんの法源はうげん  
を求もとめんふと更さらに支那しなを發はつして印度いんどうに向むかひ玉たまふ



于時年し我か陽成天皇元慶五年ふして唐の僖宗皇帝中和元年ふ當る也嗚呼親王を我が日本建國以來求法家第一の豪傑ふして弘法傳教等の支那ふ行て以て自ら足れりとするの類ふ非ざる也然るふ三代實錄陽成天皇元慶五年の紀唐書地理志等ふ依りて之れを見るるときは印度行ふ二路ある中親王は北道ふ依らむして東道より羅越を経て怒江を渡られし也然るふ路ち漸く進んで流沙河の邊ふ至りしは豈ふ計んや猛虎の為りふ害せらむ遂ふ薨じ王ひ志と也即ち陽成天皇元慶五年の紀ふ親王は羅越ふ至

り流沙を渡らんとして薨じと云ひ又ふ日本皇子傳よて親王遂ふ虎の爲りふ害せられると有る也嗚呼其れ親王は日本開闢以來印度は向ふて法源と求めんとむる第一矯矢と云ふ可き也惜ひ哉其の本志を中途は廢棄し玉ふこと是れは依て之れを云ふ龍が如き者ハ即ち是を求法第二の人と云ふ可き也然るは彼れを不幸ふして中途は之を廢し我を幸ひよして遂は其の素志を果させし而已は非ざる彼の第一求法家の志をも兼達して初めて日本求法の大榮を擧ることを得たり龍が天幸豈は些少な



らんや

銅買港「アデレツフエ」氏の話

上は述べる如く十一月四日午前第九時西印度の銅買港の「アデレツフエ」旅宿に投宿せしが其の主人の名を「アデレツフエ」と云ふが故に其の宿を名けて「アデレツフエ」と云ふ也扱て翌五日ハ案内者を雇ひ銅買都府を巡覽するふ土人街を實は醜卑衰廢相ひ谷まりたまども英人の寄留地を見れば莊大嚴麗あして之れを見る計りでさる宜なる哉英國の爲り不遂は御せらるゝこと實は悲慨の至り非むや此の主人

「アデレツフエ」なる人ハ即ち印度人ありて幸ひは英語を能くし加之ならざ印度の歴史を知ると云ふを以て即ち此の人ハ依りて印度古来の事實を歴史上は聞き又た即今内地の變轉せる實況を采り調ぶるならハ先づ稜數を知れるても有ふと考ふ故に其の譯を申し入れ依頼せし所主人の我々よ向ふて全体貴君方ハ何きの邦の人なるぞと尋ねられ故に小我々ハ「イヤツパンニス」(日本人と云ふこと)と答へし所主人の云わるゝハ是れまで日本うらハ頓と人の来らぬ邦トやが其れハ實は珍らしき邦の人



人なり然るは何んの為に此の印度に來り玉ふや  
そこで余龍自ら云ふ答て云くされむとよ我れハ日  
本の旅僧より即ち釋迦如来の大教を信奉する者  
ぞう一貴君ハ定めて工承知ても有ふが古來支那よ  
り此の印度を參ね一人々の數多有り云へども我  
が日本の素門なる者此の印度を來り一者未だ曾て  
一人も是れ有らざる也然るに即今我が日本を初め  
亞細亞地方の佛教を見るは邦として衰壞せざるハ  
先其の上其の本國たる此の印度に於ても亦と久  
しく佛教ハ敗類せりと聞く若し果して然らば實は

慨然の至り非ぞや抑も佛教と云ふ者ハ佛教實體  
に於て敢て興廢を為る者非ぞ其の興廢を為る所  
以んの者ハ全く是れ之を維持する者の手の如何  
んは在ること素より之を知ると云へども然し乍  
ら先づ此の印度に入りて此の佛教の衰壞せし手續  
きを詳らよ來り調べ其の上歐洲宗教の隆盛(歐洲宗  
教の興廢をる所以んハ既前年歐洲に入りて之れ  
を來り調べたりなる手續きと此見して大ひは佛教  
の再興を計んと思ふ心よて遙々爰に來り一也其の  
上若し釋迦佛尊の墳墓の今に存在し玉ふなら



バ責てハ我ガ人民の總代とありて一度び拜至を遂  
げ參らせ幾く久しき教への鴻恩をも謝し奉り度く  
思ふて来りしなまば庶幾しハ貴氏我を補けて此  
の素志を果たさせ玉へうしと懇に依頼せしうバ主  
人云く扱ては貴君を我ガ本國の佛教を信奉して遙  
々爰に來り玉ふの始終を承り如何にも感泣の至り  
は堪へざる也我れ等も本國のことなれど佛教の廢  
頽ハ如何計り悲まざるハ非ざれども時勢既ハ此  
の如し我れ等一孤の力らとて之れを如何んとも  
さること能はざれを徒に今日までハ暮せし也然る

に貴君ハ他國の人で有り乍らうほどまで此の佛教  
の廢頽を悲み玉ふを實に愧ぢ入りたることぞうし  
此の上るハ責めてハ貴君の素志を果し玉ふ一分あ  
りとも補け參らざる可し何なりとも心得たる丈けの  
ことを力まなり申を可し遠慮なく尋ね玉へうし然  
し乍ら釋尊の墳墓の如きハ殆ど二千五六百年の日  
文を經たれり其の痕と殆ど跡を可うらざる也我れ  
等五十歳の今日ふ至るまで隨分心懸けざるハ非  
ざれども其の何れも在ると云ふことを未だ之れを  
聞らざる也我れ等人民の墳墓とては千年も尚を遺



存せざる者有ること无し況や二千五六百年を經過せ  
る佛墓追尋のことハ實ニ思ひを絶ち玉つかしと云  
われし也其れより七晝夜の間日々「アデレフ」氏  
の話聞き大ひニ發明せし所少ならずらざる也其の  
詳細ハ我が別記ニ在るに追々述を可き也

余前日は歐洲を歴巡せしとき獨逸ニ於て「サンスク  
リット」(梵學)「プロフェシヨル」(オルデンプルヒ)「印度ニ  
在學せしこと三年と云ふ」氏又ニ露西亞の同く「プロ  
フェシヨル」(ペトパーフバトリツチ)「印度ニ留學せ  
しこと二年半と云ふ也」氏及び即今世界第一と云わ

れる英國の「オクスホルト」の大學校の「サンスクリッ  
ト」プロフェシヨル、マクスミルレル氏等ニ面をるご  
とニ釋氏の墳墓を何處ニ在りやと尋ねしハ「オルデ  
ンブルヒ、ペトパーフ、バトリツチ」の二氏の云わる  
ハ「我れ等在印中百方之れを偵尋せしこと多ク佛  
墓の所在ハ遂ニ知れざりし也と又ハ「マクスミルレ  
ル」氏云く我々の未ダ印度ニ參らざれども多年印  
度學ニ従事し居る故ニ佛墓の何れニ在るやと吟味  
せしこと實ニ之を勤めたりと云へども未ダ其  
の有無を決むること能わざる也とて何れも皆な墳



墓ハとても偵尋を可らざと云われ也今此の土  
人「アデレツフ」氏の話尚不然るとき到底偵尋を  
るの難しと云ふことハ思ひ合せて徴せらるる也  
扱て鋼買は留置をること既又七日「アデレツフ」氏  
の話も槩數之れを聞き取りたまども何と申をも教  
法學は於て素人のことなれを宗教上は就ての眞  
の實際ハ詳明なり難けきハ爰ハ先づ去る可しと思  
惟しければ余「アデレツフ」氏は向ふて云く全く貴  
氏の高庇に依りて印度内地の事實略不其の槩數と  
得たれを我れ等是れより内地に入るの針方之をよ

過ぎたる嘉祝ハ元き也其れを就て明日ハ一と先づ  
此の地を發せんとを抑も内地に入るよハ何れも路  
を采るを便とせざるやと尋ねけきを主人の云く之を  
より内地(中天竺)に入るふ二路有り即ち一路を右の  
方「パンウエル」より「ボナー」に出で、中國(中天竺)不行  
く路有り又と一路ハ左の方「ゴルリア」子より「ナツ  
シツク」に出で、北天竺に至り然して后ち中國は行  
く路ち有り然るも右ぎ「パンウエル」の方ハ其の路近  
しと云へども太と嶮難ありて或ハ草賊の人を害を  
る少なうらぎ其の上る猛獸毒蛇の害「アデレツフ」

天竺行路次第 卷之三 十七



氏云く凡そ五天竺の人民年々この獸蛇の為りは害  
せらるゝ者殆ど七八百人よ及ぶ實は如何んともを  
可らざる國難なりありて往々其の害は罹る者亦  
た太ど少なうらざれば此の通路の如きは土人尚や  
之を難んぞ況や他邦の人をして中々通行困難  
なれを思ひ止り玉へうと又と左り「カルリアー子  
より「ナツシツク」の方へ太だ迂路なれども此の行路  
の如きはさほど困難も多うらざれを庶幾は此の路  
より行き玉へうと云われ故に即ち同氏の教ふ  
の如く左り「カルリアー子より發をること、決りたる也」

同十七日午後第七時三十分鋼買港の「バイクラヤ」と  
云ふ「ステーション」より航車に乗り即ち左の方「カル  
リアー子」の行路に向ひたり即ち車中路傍の村々を  
點見する其の人民の居住たる宛も曾て實見せし  
露西亞の村々民居の卑醜矮陋なると少しも變るこ  
と無く之を比され我が日本の山里に住み古び  
たる百姓の家居こそ余程ど上等(是れまで世界中を  
歴見せしは何れ一つ日本の勝まさと思ひしこと一  
つも無くあり)と天竺を來りて初めて此の者あり  
天竺の委靡思ひ合も可なりと感ぜられり



又た或ハ其の四方を見渡せば曠野の茫渺として其の遠涯と究むること能わざる者ありて(此の野の幅貧宛も日本全國位ひの大さ程ありと思わる)其の地頗る乾燥ふして殆ど沙漠と其の雄を争わんとする沙色ふして其の所々躑躅や五月木の如き木が河原蓬の濱邊にころころたる如くころび植まころついで有るを見るの外樹木とてハ更よ之れを見るること无き也然して其の往々在る所の石面を見るは皆な悉く黒く焼て宛も火事場の跡の石の如し之れを以て天竺の暑さを測り知り玉ふ可き也

午后第一時頃鐵路悠々殆ど倦怠の思ひをなし居まし所車中の丁夫(此の丁夫ハ頗る英語を能くを來て慰して云く長路悠々たり定めて倦厭ふ耐る玉る可し我れ且く諸君の為めハ天竺旅行の憾心す可きを述べ可し抑も此の天竺の國たるや即今亦て其國力大ひ小冷落して民庶太た貪黠なり是を以て草賊細盜山野幽僻の間ハ出没して時々行旅を砲害して其の囊装を掠却するありて内外の人々此の害に罹る者太だ少なうらざる也諸君ハ遠方の旅客深く憾心せざる可からざる也其の上る殊ハ憾む可きハ



此の鐵道線の大賊あり此の賊や百人或ハ百何十人  
各々馬小跨り銃を持し夜間小乗トて此の鐵路の脈  
線を抜き去り臙車を一粘著拘止せ令めて直ち小  
其の乗客を砲擊鑿殺して一人と剩を所无く悉く其  
の旅装を掠奪して去る宛も忽として煙の消るるが  
如く其の痕實小踪を可からざる也嗟呼曠野遼々  
り印度政府と云へども之れを如何んともを能わ  
ずと聞く其の狼戾慘虐の太き實小名狀す可からざ  
る也此の賊や六七年の間たふと或ハ一度び發現し  
て大ひは通行の人民を害するふと有る也是を即ち

鐵道通行の人の深く戒懼す可き所なり蓋し竊賊の  
あらざる邦と之れ死しと云へども印度の如く此の  
賊の最も多き邦と亦た有らざるかと是れ小依て之  
を云へば印度の冷落實小徴をるは足るなりと云  
云龍云く邦の頽廢意外の不幸を生を鑑す可き哉  
鐵道漸く進んで往々村落の有るを見る小馬牛の休  
憩をる者十の中か六七匹ハ皆な河中小沈卧して首  
丈け出して居る有り即今ハ十一月の十七八日小  
て世界一般何れの邦に於ても仲冬にして時侯太  
寒烈なり然る小印度の馬牛此の如きの休憩を為

天竺行踏流西歸 卷之三 二十



我々等世界中の大数の歴経せしものども此の如きの  
奇観の未だ曾て之れを見ざる所なり嗟呼世界萬象  
の異同の温度の強弱は依て然る者といふ云ひ乍ら餘  
りの奇観なるの故に爰に記をる而已印度の熱國と  
る推して知る可し是れより經る所の村々等實に記  
する不遑ま有らざる也

十九日午前第六時漸く北印度のアルハバト府に達  
し即ち「アルハバトホテル」と云ふ旅宿に投宿翌二十  
日所々見物せしども別は案内者の我れ等を誘ふ  
る人も死ねば何をしても頓とさつたり解らざる折角

不善惡俱非の三境に對し乍ら其の能縁の三心是れ  
の印度ヒロソフイ一中に物を見るに就て起る心の  
實際なり他日便を埃て辨む可しを起す不由し死く  
唯偶然とて一日の將に西に春んとす頃即ち旅宿  
に歸りたり然るに前日は英國に滞在して此の印度  
行の末を話せしとき英人皆云く即今印度全國  
を擧て我が英國の版圖中なれば都府人民の素より  
論無く仮令に僻陬陋巷の細民に至るまでも我が英  
語を話さざる者殆ど死き位のことなれば君等若  
し印度は行の勤めて英語を以て入り玉ふか」と



云ハれし故も即ち英語ハ黒奇雄ニあり獨逸語ハ我モ阿モを大丈夫なりと自ら信ドク參モ一ハ此の「アルハベト」中ニ於テ英語を能クモる者屢少よし案内者さるモ傭ヒ兼ぬる程のホとなり一ハ宿の主人ハ太タ聊之れを話し得るヨ付き何卒モ印度人ホ一々英語を能ク一且ツ印度の歴史ハ通トたる人あらハ我等が為メ傭ヒ玉われろ一と依頼せ一るバ主人云ク此の地ハ太タ不學な所ヨ一ハ到底貴望の人ハ之れ死一とのホとなモ其れでハ仮令ヒ久一々爰モ止まるモ遂ホ无益なりと見占し故モ速

ホ爰ハ去る可一と決したり爰モ於ても所々ホ一釋墓の所在を試問せ一ウども更ホ知る者一人モ死キ也

翌二十一日午前第七時「アルハベト」ステーションヨリ轎車ヲ乘リ又タ々々長路悠々かの有名なる鉛絶嘶なる恒河の水流ヲ浴フテ東南の間ヲ向フテ走る此の日天氣牢晴ヨ一々日中の溫度殆ど日本の大暑ヨリも尚ホ惡ヤホ暑ク思われしナリ午前第三時頃「シルシャール」と云フ都府ホ至リ宿を是モ亦々英語を為すもの太タ希れホ一テ何ホ事を問尋一々



も更さら不り了り辨べんをるを得えず釋ま墓ぼのこを尋たづねても知る者亦もた一人も死しき也故ゆに止やむを得えず翌あした二十二日午ひる后ご第一時いちじ「ミルシヤール」を發はらし又また恒こ河が不そ浴そふ東北の間また不ま走まり遂すに恒こ河がの南みな岸がなる「ステーション」に至いたり爰こゝに於おて下くだ乗りせし不た數た名の案あん内ない者しや此この案内者あんしやの各おの々お英語えいごを為なす競きやうひ來きりて云いく是こゝを即すなはち北印度きたいन्द中有ちゆう有名ゆうめいの大たい都會とくゐたる比ひ拿な力りき府ふといふ爰こゝなり庶しよ幾げに來き宿しゆくあらんかとを依よりて其そのの一人ひとり不た旅りよ装さうを托たくし即すなはち津つ頭とう不た船せんを備びひ乱らん不た恒こ河がを渡わたり北きた岸がに達たつしたり其そのをより行いくこと一ひと里り余よ英えいのマイレマイル）不た比ひ拿な

カ府ふ不た至いたり即すなはち「ホツルス、ホテル」と云いふ宿しゆく不た投とう笑きやうしたり此こゝの宿しゆくなる家いえに印度いन्द風ふうの構こう畫がなれども太たた爽そう大たい不た暑しよ熱ねつの憂うれへ死しかる可べく加かふる主人しゆじん亦また英語えいごを能あたくすれむ百ひやく事じに就つき其そのの調てう査さの都と合ごうも宜よろしうる可べしと思おもはる也是こゝに於おて所ところ々の宿しゆく々々てい印度いन्दの「ライスカリ」土ど人じんの食しょくは以もつて實じつ不た好こう味みなり他た邦ぱうの「ライスカリ」等らうの及およぶ所ところはた非ひざる也而しか已まを食しょくせし爰こゝに至いたりて始はじめて又また洋やう食しょくを呈ていせらる其そのの宰さい魚ぎよ少せうも歐おう洲しゆに讓じやうらさる也翌あした朝あさ主人しゆじん我われ々ら不た向むかふて君きみ等らも何なにも何なにの邦ぱうの人ひとありて



爰<sup>こゝ</sup>ゑ何<sup>なん</sup>の爲<sup>ため</sup>に参<sup>まゐ</sup>られしと尋<sup>たづ</sup>ねらるし故<sup>ゆゑ</sup>に余<sup>われ</sup>  
鋼<sup>くわう</sup>買<sup>かひ</sup>の「アデレツフエ氏<sup>し</sup>」は答<sup>こた</sup>へし如<sup>ごと</sup>く話<sup>わ</sup>せしり主<sup>しゅ</sup>  
人大<sup>おほ</sup>ひふ喜<sup>よろこ</sup>んで云<sup>い</sup>ふ然<sup>しか</sup>らむ君<sup>きみ</sup>等<sup>ら</sup>は日本<sup>にっぽん</sup>の人<sup>ひと</sup>なるか日<sup>にち</sup>  
本人<sup>ほんにん</sup>の此<sup>こゝ</sup>の印度<sup>いन्द</sup>ふ來<sup>き</sup>りしおとへ未<sup>いま</sup>だ聞<sup>き</sup>かざる所<sup>ところ</sup>ふ  
一<sup>ひと</sup>々<sup>た</sup>實<sup>じつ</sup>ふ珍<sup>めづ</sup>らしき邦<sup>くに</sup>の人<sup>ひと</sup>々<sup>た</sup>なる哉<sup>や</sup>其<sup>その</sup>の上<sup>うへ</sup>に我<sup>われ</sup>が本<sup>ほん</sup>  
國<sup>こく</sup>の佛<sup>ぶつ</sup>教<sup>きやう</sup>を信<sup>しん</sup>奉<sup>ほう</sup>して爰<sup>こゝ</sup>に來<sup>き</sup>りて其<sup>その</sup>の佛<sup>ぶつ</sup>教<sup>きやう</sup>興<sup>きやう</sup>廢<sup>はい</sup>の事<sup>こと</sup>  
實<sup>じつ</sup>を調<sup>てう</sup>査<sup>さ</sup>し且<sup>かつ</sup>つ佛<sup>ぶつ</sup>墓<sup>ぼ</sup>の所<sup>ところ</sup>在<sup>ざい</sup>を平<sup>ちやう</sup>問<sup>もん</sup>せんとせらるる、  
こと實<sup>じつ</sup>ふ感<sup>かん</sup>銘<sup>めい</sup>の至<sup>いた</sup>りふ堪<sup>た</sup>へざる也<sup>なり</sup>我<sup>われ</sup>れ等<sup>ら</sup>及<sup>およ</sup>ぶ丈<sup>だけ</sup>け  
の補<sup>ほ</sup>弼<sup>ひつ</sup>は爲<sup>な</sup>し参<sup>まゐ</sup>らむ可<sup>べ</sup>し何<sup>なん</sup>なりと必<sup>かなら</sup>ず遠<sup>えん</sup>慮<sup>りよ</sup>なく托<sup>たく</sup>  
せられしといと懇<sup>ねん</sup>ふ云<sup>い</sup>ふれし故<sup>ゆゑ</sup>にさきをむとよ別<sup>べつ</sup>ふ

六<sup>む</sup>つヶ敷<sup>し</sup>きことよも非<sup>ひ</sup>ざれども庶<sup>しよ</sup>幾<sup>げ</sup>くの最<sup>もと</sup>も土<sup>ど</sup>人<sup>にん</sup>  
よして英<sup>い</sup>語<sup>ご</sup>を能<sup>よ</sup>くし且<sup>かつ</sup>つ又<sup>また</sup>と印<sup>いん</sup>度<sup>ど</sup>の歴<sup>れき</sup>史<sup>し</sup>は通<sup>つう</sup>じた  
る人<sup>ひと</sup>を雇<sup>こ</sup>ひ玉<sup>たま</sup>わり度<sup>ど</sup>いと云<sup>い</sup>ひけねば主<sup>しゅ</sup>人<sup>にん</sup>の云<sup>い</sup>く其<sup>その</sup>  
のことなきは我<sup>われ</sup>れ少<sup>すく</sup>く考<sup>かう</sup>へ有<sup>あ</sup>り一<sup>いち</sup>兩<sup>りやう</sup>日<sup>にち</sup>の跋<sup>はつ</sup>ち玉<sup>たま</sup>  
ゑ采<sup>さい</sup>り調<sup>てう</sup>べ参<sup>まゐ</sup>らむ可<sup>べ</sup>し其<sup>その</sup>の間<sup>あい</sup>だに衰<sup>さい</sup>壞<sup>くわい</sup>せし都<sup>と</sup>府<sup>ふ</sup>ふ  
れども釋<sup>しやく</sup>尊<sup>そん</sup>の古<sup>こ</sup>跡<sup>せき</sup>等<sup>ら</sup>も少<sup>すく</sup>あらずされば所<sup>ところ</sup>々<sup>た</sup>見<sup>けん</sup>物<sup>ぶつ</sup>一<sup>ひと</sup>  
玉<sup>たま</sup>ゑりしと云<sup>い</sup>われし故<sup>ゆゑ</sup>に即<sup>すなは</sup>ち其<sup>その</sup>の意<sup>い</sup>は從<sup>したが</sup>ひぬ  
扱<sup>あ</sup>て翌<sup>あした</sup>二十四<sup>にじゅうよん</sup>日<sup>にち</sup>ハ午<sup>ご</sup>前<sup>ぜん</sup>第<sup>だい</sup>八<sup>はち</sup>時<sup>じ</sup>頃<sup>ころ</sup>より宿<sup>しゆく</sup>の男<sup>おとこ</sup>少<sup>すく</sup>く  
英<sup>い</sup>語<sup>ご</sup>を話<sup>わ</sup>さる案<sup>あん</sup>内<sup>ない</sup>者<sup>しや</sup>として先<sup>ま</sup>づ此<sup>こゝ</sup>の都<sup>と</sup>府<sup>ふ</sup>中<sup>ちゆう</sup>王<sup>わう</sup>宮<sup>きやう</sup>の  
類<sup>るい</sup>蹟<sup>せき</sup>を初<sup>はつ</sup>め各<sup>かく</sup>國<sup>こく</sup>諸<sup>しよ</sup>侯<sup>こう</sup>の舊<sup>きゆう</sup>館<sup>くわん</sup>印度<sup>いन्द</sup>封<sup>ふう</sup>建<sup>けん</sup>政<sup>せい</sup>治<sup>ち</sup>の時<sup>とき</sup>諸<sup>しよ</sup>大<sup>だい</sup>



名の交代在留せられ館舎なりと云ふ也等を巡覽  
をるも何れも皆不敗壞相ひ谷り僅に細門小舎の遺  
在せると其の茂樹喬木の寥々を見るの外り他なき  
而已嗟呼印度の衰敗何ぞ其れ爰に至れるや然るも  
我が日本の如きハ幕政の敗れ諸侯の斃れハ却て  
王政大新の國榮を擧ぐるに在りと云へども今印度  
の如き王政の止む諸侯の頽るハ則ち英國の財  
政を充とも歸して印度經國の大軸と云ふ者ハ去  
て他國の有となる嗟呼印度の不幸何ぞ其れ爰に至  
れる然して我が日本の華族(大名)ハ皆ふ之れを東京

に引き集めたまども印度の華族の如きハ皆な之れ  
を其の舊領地ニ居ら令むと云ふ也是れ即ち政略上  
の同異よりて他日何れ得失あるや識者非ざる  
を知る能わざる所なり其れハさて措き其れより「ア  
ストロノミー、キルヘ」天文の寺及び「デルデン、ツルム  
黄金の寺」アツフエ、キルヘ「猿の寺」等を儲せし也此の  
中「アストロノミー、キルヘ」とハ土人之れを稱して  
天文寺と云ふ此の寺ハ石を以て組建たる者よりて  
其結構の堅緻なる今日歐洲に在る所の石造形の王  
宮や大學校の如き者よりて全構悉く石造なり此の



他は石造及び煉瓦造の古屋等の所々ところに在るを見れば今日歐洲の石造瓦造の大原も是也亦印度の文明と共に西よしたる者と思わるも也是也即ち釋尊曾て人民の日用百事ひやうひやうに就て親おく時間を指示しを為り此の寺の屋上やうじやうに於て天文機械てんもんきがい十數有り皆大なりを陳列ちんれつする也然して其の陳方ちんぽうたる全く「ルド、ポール（北極）を原もととして組建くみぞたる者ものにして人苟いも之れに向ふむを一年及び一月の日數ひかずより一日の時間じかんに至るまで賢けんと死しく愚ぐと死しく一いち目了然りぜんたらざること死しく實じつは巧くわうみなりと云ふ可よき者ものあり然して其の機械きがい（此

の具ぐ各々其の度目どめを彫ちゆう在ざいせしたる皆みな石いしを以て之れを造製ぞうせいし其の大小おほき皆みな有あり餘あまりして實じつは壯大そうだいなる結構けうかうなり是也即ち「子、ウォール」の日時計ひどけいにして今日我々が携持けいぢする所の時計どけいの大原おほげんと云ふ可よき也嗚呼あゝ三千年前の昔むかし此の如ごときの備具びぐを為なし釋尊しやくそんの大識果だいしきくわして信徵しんしゆくを可よき哉抑おさも古代こくわいの人民じんみんたるや「子、ウォール」の日時計ひどけい「サンド、ウォール」の沙時計さどけい及び「ワツセル、ウォール」の水時計みづどけい等を以て其の當日とうじつに適用てきようせしと云ふことい歴史れきし上じやうに邈然ぶつぜん之そのを傳つたふるそのと云へども其の改進かいしんの秩序ちつじは於てい容易よういに之れを



知る可からざる也(チモチーセン氏云く)「ジ、チヤイト、デヤ、エルヒンドンダ、デヤ、ウォール、イスト、ニヒト、ゲノウ、ベカント」と云ふて時計の發明せし時代の密よの知をぬと云ふ意也(然るは百二十年頃「レーデル、ウォール」(車時計)よりして今日の回轉時計なり)を「コレステルン」ふ於て之を發明し又と百四十年の頃「ツルム、ウォール」(塔形の時計)を「ストラースベルヒ」ふ於て之れを發明し其れより后ち千五百年の頃「ベツテルヘーレ」氏「ニルンベルグ」ふ於て「タツセン、ウォール」(袖時計)を發明し及び千六百五十八年の頃「アイク

ヘンス」氏「ペンデル、ウォール」(振時計)を發明せし等よ依て時計の開進駁々として今日に達することを得たりと云へども蓋し此の寺の時計こそ世界一般の大原と云ふ可き欵次は「ゴルデン、ツルム」(黄金の寺)に至りし也土人云く此の寺を釋尊存在せしとき各長者等が集りて建呈せし者なりと然るは此の黄金の寺に就て歴史上を以て之れを見るときは凡そ全地球上に於て二つ有りと云ふ也其の一は此の印度の比拿力府の「ゴルデン、ツルム」是也又と其の一は緬甸國の藍古の港に在りと云ふ也然るは此の比拿



カ府の「ゴルデンツルム」の其の寺の屋根二つ有りて  
其の一ハ二丈五尺計りありて其の周圍凡そ四丈計り  
有り又その其の一ハ其の高さ一丈五尺計りありて其  
の周圍凡そ二丈餘も有る可き也然るは其の二個の  
屋根を葺くは黄金の板を以てして其の板の厚さ八  
分(竹尺なり下も之れも倣ふ)計り長さ四尺餘り其の  
幅ハ一尺二三寸有りて其の金色たるや最も真の黄  
金色にて我ガ甲州金よりも尚不真黄金色なりと思  
わろ也然るは「コンクレート」日本計りのことと考  
ゑて居ることの考を以て之れと云へば我ガ邦の

金の鱈など金細工でも世界第一の壯大なる者ハ有  
らトと思ふとも之れを廣く「アブストラクション」總  
て世界中を考へ亘ることの考を以て之れと云へ  
ば印度や藍古も於て此の如き金細工の壯大なる寺  
グ有るはも關らば我ガ邦の此の金の鱈こそ即ち世  
界第一の壯大なる物なりと自ら極りて前年有名な  
る奧斯土利國の大博覽會を遙々持ち出せしこと杯  
の如何は知らぬが佛けといふはなからも餘りあり  
ても塊然たる「コンクレート」の考をなりと云ふざる  
を得んや此の如き狭小なる考を一日も早く放却



せねむなりぬと云ふことと深く心底に感悟せしぞ  
 かし次は「アツフエギル」は至きを凡そ猿猴の多き  
 六七千匹も有る可しと思わる嗚呼名を實の實なる  
 哉此の寺も昔釋尊の建つる所ふして此の如きの  
 猿猴ども原と佛徳を欽して集りて者と云へども是  
 れを必竟して野人の口碑ふして別は来る所无きな  
 り以上の寺々も本と皆な釋尊の建る所と云へども  
 今日ハ悉く「ラマ」宗の所有となす也是をよる歴  
 史上の説ありて實は悲慨の至り耐えざる也今日  
 ハ先づ之を小て旅寓を罷り歸り也

晚来主人余が席に來り云く兼て尊托の一人漸く之  
 れを得たり名づけて「ラインブ、チヤン子ル、バ子ルゼ  
 」と云ふ也此の人を年一既は六旬ふして印度の歴  
 史に通し兼て英語を能くそれを先づ試み之れを使  
 用し玉えりて云ふれ故に即ち同氏を傭ひ之れ  
 より日々印度實際専ら釋尊滅後の實際等なりのこと  
 とを歴史上に采聞したり此の書き采りたる者遂に  
 數卷に及ひさるを今爰に之れを枚舉するに耐えざ  
 る也他日便を俟て述を可き也

釋尊墳墓偵尋の話



一日余「バ子ルゼ」氏に對して云く余曾て玄奘の西域記を讀んで此の邦の幅員其の時の民數宗旨の大小等ハ粗大之を知らざる足ると云つども單純なる僧家の筆法少く世は遠くと云はざるを得ざる其上の復た既ふ千有餘年を経過しこれを今日の事實を知らざる由し免き也頃日幸は獨逸の「シラーギントワイト」氏の印度旅行記を讀む即ち「デヤ、ランドレヤフト、デヤ、コルトア、ウント、ジツテン、デヤ、インヘルビンドング、ミット、クリマーチーセン、ウント、ゲオロギーセン、ヘルヘルトリス」と云ふて即今此の印度の地理

と氣候の間於て住む所の民人の社會と文明と及び風俗の繁數の如きは頗る之れを知るに足りし也然るに今亦た自ら來りて爰に跋渉し更は氏の説明を聞て益々其の詳明比考する所ありて我れ等歸朝の上にも必ず大に其の爲を所ある可きの秩序を得たり實は氏の嘉貺と云はざるを得んや此の上にも夫氏若し釋尊の墳墓の所在を知り玉まされば懇小我も告げられれば假令千里の遠遠と云はども我も必ず詣至せんとす也と云ひしを氏云く余不肖と云へども他事なれど如何やるとも對辯を致す可くなれ



ども釋尊墳墓のことと我れ等五十年來此の印度小  
住在と云へども未だ其の何れと在りと云ふこと  
を聞ざる也凡そ三千年來の今日ありて之れを偵尋  
せんこととえ太だ甚ど難うる可き也寧ろ曠日累久徒  
煩勞せんより如りむ他の古蹟等を尋ね玉わんふ  
もと云これし故と余云く去れむとよ此のことと我  
れ歐洲と在りるとき諸の識者達と熟計り前日は  
鋼買港と着せるとき「アデレッツフェ氏」も訪求ねた  
りしと何きも皆な知れ難しとのことなむども當府  
ハ鋼買よりハ既小千數百里(英の「マイル」)も印度の

央と在る有ればよもや知れぬことの有るまじと思  
ふて尋ねしぞあり其上名日本開闢以來東門の爰  
と來る者全く我を以て大始とすれば之を求む  
る亦とも亦た是れ我が本分とる也若しや其の墳  
墓の失亡せしとならむ責めて其の在りし地方も  
も示ゆ一玉とれかして種々の地名(西域記釋氏要  
覽名義集等)その他の書典に散在せし所の地名を擧  
て咨問せしかども我が稱する所の者を總て釋尊在  
存のときの「サンスクリット」古代の梵名なり然るも  
今より千有餘年前と比耳西亞等の他邦の言の入り



來りて土語と混成してより以來印度の話し方遂に  
今日の變態に至る之れを「パリ」と云ふ也の名なれ  
バ「バ子ルゼ」氏さるも之れを解することの能わざ  
を互に邀然として殆ど其の針路を得る不由し无  
きに至り是に於て余卓を撃て歎ト云く今我れ  
の爰に來るに即ち是れ千歳一遇なり我れ倘し容易  
に此のことを烏有に屬せしならむ誰か又來りて  
之を踪をる者あらんや丈夫苟も斷じて爰に來る氏  
ありて之れを知らずむ氏其を之れを措け我れ豈不  
飽氣ならんや我れ印度二億五千萬の人を計りて責

めても其の古蹟なりと必す實乎ね參らむ可しと  
云へバ「バ子ルゼ」氏も少しの蹙然の色を現し且  
くの沈止し居られし稍やありて手を摩して云く  
嗚呼師が素望の岸然たる實に感餘りある哉故に我  
れ亦に囊を叩て之れを思惟するは五年以前のこと  
なりしが即ち爰に比拿力府の「チャイトング」新聞に即  
今中印度に於て釋氏の墳墓を掘り出ると尋ね  
出だせしと云ふことの有りしなれど何を云ふ  
も新聞上の記説にして然も數百里遠外のおとなれ  
ば左のみ意を注わざりし也師若し試み行へんとな



らバ宜く中印度入りて之れを尋ね玉ふりし或も  
 千一も之れを得ること有ん歟然し乍ら唯だ  
 師の意不任を可き而已果して然らざるときハ師其  
 を我グ杜撰を咎むるおと勿れと是に於て我れ粲然  
 として笑ふて云く氏憂ふること勿れ我を自ら行て  
 自ら過る即ち何んの氏を咎むることハ之れ有んや  
 然りと云へども今此の氏の一説こそ即ち是を烏有  
 中の一針小して凡そ其れ烏有に依らざるハ真有に  
 達せらるるを物の數なり我を必む氏の一言に依  
 て行く可し氏其れ憂ふるおと勿れと云ひけむ

子ルゼ「氏も大ひ不安心致されし体にて云く然ら  
 バ師仮令ひ行くとも今且く爰に留筈し玉名ありと  
 我れ即ち云く諾我も今且く留りて尚不咨問ること  
 も有る可しとて此の日を是れにて散じたり  
 以下印度の「クリマ」及び内狀等  
 一タ余「バ子ルゼ」氏又問て云く抑も印度の「クリマ  
 」氣候たる果して如何程の溫度にまで昇るものと  
 するや即今既十一月の末にして我を等日々彼此  
 の間不徘徊するハ午前第十一時頃より午後第三時  
 頃まで蒸熱日本の大暑の如し焼くか如くとて



歩行ハ困難ナリ此の分なまを暑中まよちうハ如何いか不ふどの  
 温度おんどふまて昇のぼるものなりや「バ子ルゼ」氏云く我ガ  
 邦の温度おんどたるや極暑ごくまよちう中ちゆうふも高たかきハ即ち百四十一二  
 度どふ及び人皆みなな云く本年このとしハ餘あまほど暑あつしと云ふ也又  
 九こ低ひきハ即ち百二十四五度どよして止とどむ人皆みなな云く  
 本年このとしハ甚こゝろど暑あつるらむとなり日本にっぽんなどハ大暑たいまよちう中ちゆうふも  
 大おほ体たいいゝるやど昇のぼるものとをるや余云く我ガ本國ほんこくの  
 如ごときハ九十四五度どよ達たするを非常ひまやうの極暑ごくまよちうとして人  
 皆みな云く蒸熱まやうねつ太た甚こゝろたしと然しかるは我ガ日本にっぽん人ひとをし  
 て此の温度おんどふ達たし令まめむ必かならず舉あげな燒死まやうじを可べし宜べべ

なり頃日ころひ臘車ろうしゃ曠野くわうやを過よりしとき往々あちこち石面いしのをを見みるふ  
 燒やけて宛あやうも火事場くわじばの石いしの如ごとし皆みな悉ことごとく黒色くろしきを浮帶うたい  
 せり今いま氏の説せつを以もて果はて徴しるしをるは足たる也  
 「バ子ルゼ」氏云く我ガ邦くにの如ごときハ暑あつさハ即ち暑あつし  
 と云へども四季しきの草花くさばなハ同時どうじふ笑わらきて少すくしも四季しき  
 小こ関くわんをること死しく之これれを殖うゑさえ其そのれを常時じょうじも芽め  
 を茁さかし花笑はなわらいて時ときとして花はなの有あらざることに死しき也  
 然しかして中印度ちゆういんどうより東南印度とうなんいんどう西北印度せいほくいんどうの如ごときハ乾野かんや  
 确地かくち多おほくして東南印度とうなんいんどうの如ごときハ物ものの出來ありぬるの  
 如ごときハ一年間いちねんかんふ三回さんかいづ、獲收くわくしゆうをるを以もて常じょうとを其

天竺行記

卷之三

三



の他の菜蔬さいしょの類るい不至たるまで蕃殖ばんしょく充みつて少すくくも欠けつ  
 所ところあること无なし之れを以もつて我われが人民じんみんの幸さいひとまゐる  
 所ところあり豈あふ他た邦わう人民じんみんの耘耕うんこう過くわ勞らうして僅わずかか得う得うの類るい  
 ならんやと云い云い龍りゆう竊せつるを以もつて之これを云いふときも假かり  
 と云いふもの歎なげ然しかし我われ々々を以もつて之これを云いふときも假かり  
 令とひ三さん回かいの獲と收しゆうハ四し回かいの榮えいを得えるとても此この如ごとき  
 大たい暑しよの邦わう又また住すむこと能あたふまどき也なり前まへ日ひ獨ひとり逸やすふ  
 在ありしとき「オルデングル」印度いन्दのことを委たくく記きし  
 たる史しなりを見みるふ云いく印度いन्दの如ごときも蒸じやう熱ねつの邦わうな  
 れども其そのの黍稷ちよまきの蕃殖ばんしょくは於おてハ全ぜん世界せかい中ちゆう其そのの比ひ无な

一と云ふも可たなりん歎なげ其そのれ故ゆゑも人民じんみんの將まさ欲やくハ甚ただ  
 充みつて敢あて他た邦わうを求もとむの意い无なき故ゆゑも其そのの人民じんみんの  
 性せい質しつハ「チーフ、デンケン」とて唯ただだ内うちのこと計かりも考かう  
 名なを深ふかめて他た邦わうに向むかふての方ほう略りやく對たい交かう等とうのことハ少すく  
 しも之れを持もつこと无なく其そのの上うへハ蒸じやう熱ねつの為ためも間ま  
 さえ有あれば懶らん眠めんをしることを而のみ已や樂らくんで居ゐる故ゆゑも人  
 の氣き力りきと云いふ者ものが早はやく衰あ萎ろをして何なにもごとも長ながく之  
 を保たもつとるもと能あたふもざる故ゆゑも折せ角かくは開ひらけた文ぶん明めい  
 も早はやく衰あ去しつたる者ものなり即すなはち亦またた「ガキヤモニ」  
 ブジイスマス「釋迦教」の教きやう名なの如ごときも意い外がいも早はや速そくも



衰えたるを蓋し亦た此の理に依ること死んやと云云せり龍云く此の「オルデンブル」と云ふ人も「サンスクリット」(古梵字學)の博士にして余獨逸に於て屢々此の人を面ぜり此の人印度に留學をること數年にして其の見る所の實檢説なまば今諸君の印度を見る為めの一片の参考に記呈をる而已印度に於て除く可らざるの國難余「バシルゼ」氏に問ふて云く余曾て英國に在りしとき「チールガルテン」の動物園に於て印度の獅子猛虎及び毒蛇(長さ七尺計り周圓七八寸も有る可し)を

見る小人皆な云く此の三獸を印度人民の如何人も為る可らざる所の三害物なりと今尚不果して然る歟氏云く去きむとよ此の三獸に我が邦國初に來の害物にして民人の之れを罹りて死する者年毎に殆ど七八百人に及ぶ也君見ずや彼の銘絶斯河の左右に遼たる曠野ありて往々數百里の藪原を見る其の中にお猛虎を棲生を(日本に於て竹小虎と云ふ諺の來る蓋し爰に基くならん歟)其の數を幾く百と云ふことを知らざり又た獅子に有名なる喜馬拉山中に蕃生し四方の群山に移住して彷徨喫噉たる是を



亦た如何とも防止を可あらざる也又た毒蛇の如き  
も野と死く山と死く隠見恒死く人を見きむ必ず糖  
探する宛も丸を飛バをぐ如し苟も一度之れ不觸る  
るときは立は即死其の害實小獅子猛虎よりも太  
きもの有るなり此の三つの物の政府と云へとも力  
ら之れを除去する能ざる所ふく我が邦永遠の  
大害物なり嗟呼果て之をクリマの為を所とせ  
ん歟未だ何者の所為たることを知らざる也然し我  
が邦の人民の如きを槩ね此の害を逃るの憾め方  
を知ると云へども今諸君の如きを他邦の人殊は佛

墓搜索の為めは如何なる地に至ると計る可うら  
がきを深く注意し玉えうと  
「バ子ルゼ」氏云く其の上え我が邦ハ恥う乍ら小  
賊大賊の多き邦よく行旅の此の害は罹る者太だ  
些少なれば是を亦深く注意し玉えうと余  
答て云く其の委詳は項日轅車中は於て之きを聞く  
今亦は氏の言は依りて益々徴する所あきを深く憾  
心を可し氏其れ之きを安んぜよ氏の懇到ハ我を等  
死事を保つの方針なり實は感荷不耐えと謝し  
り龍云く邦苟も費弊をるときは人民爰不至る嗟呼



恐る可き哉

「バ子ルゼ」氏云く貴國（日本）を指すの如きも即今文明日々不閉進して萬國と對峙するも足ると實不欽然不耐えざる也然るも我々邦の如きも衰爛爰不谷り全國舉て英國の所領となり我々民人の苛政は苦む未だ今日より太だ甚きハ有らざる也今其の一を以て之れを云へば鹽の主權法（龍曾て漢の汝南の桓寬の鹽鐵論を見るも漢の武帝の時此の鹽鐵主權の法を行ふて官専ら鹽鐵の利を占めたること有り主權といはば獨り其の利を收むるの謂也今英國の鹽

も依て専ら其の利を占る者宛も漢の主權法不似たる也然るも漢の主權法ハ唯だ其の賣り方を管する而已し其の價は平常と異なること無し今印度の如きハ其の法非常の價を倍取を實し苛虐と云こざる可けんや是れ也是れ即ち此の法を以て印度全國の鹽の價を統一して英國財政の收入を計るもの也即ち其の價を云へば印度の「ロピ」天竺の壹圓の十分の八分五は當る也此の中其の一分を以て正しく其の價とし其の七分五ハ之れを求むる為めの印紙代とせら也槩して日本の金を以て之を云へ



拾錢を正しく鹽の代價となり七拾五錢を之れを求  
 むる為め不添出を可き印紙代とある即ち惣計をね  
 む鹽壹合の價が八拾五錢の位不當る也其も鹽を得  
 るの貴き既爰に至る其上を我が邦の如き幅  
 員廣大にして海輪遼遠なきも鹽を得るの路この苛  
 法に依るの外更に他方なき也是を以て我が細民  
 の如きハ苦考密案して窃りに山土や樹葉等を煎て  
 少一の鹽を采る小其の事苟も發現をるときハ忽ち  
 重懲役等不處せらきて家族擧て遂は饑餓不凋滅を  
 る者往々少からざる鹽の為めハ苦む者亦た復々爰

不至る也其の他の國稅地方稅及ひ諸運上等の如き  
 從ふて其の倍蕪を推て懲察し玉るし是を以て  
 我が人民の如き其の勞力不を得る所の者ハ他分え之  
 をを公に收めて其の殘る所の者を以て僅うは我が  
 一命を活ぐ而已其上を英國の威武に統壓さきて  
 朝の起床も英國の大砲夜の卧床も英國の大砲唯た  
 大砲々々の響の内は怪怛して少しも安心の位地を  
 得ぬぞっ嗟呼何ぞ英人の苛戾ある嗟呼何ぞ我が人  
 民の不幸なる實は悲慨の至りは耐えざる也之も不  
 就て我が土人竊かよ以為く若し兵力を以て此の挽



回を計らんよと英國兵敷の嚴密堅緻なるとても我が  
微力を以て之を為さんよ却て一層の大害を惹起  
せん如うぞ先づ我が文明を發育して然して后ち之  
をを計らんよと思ふとさしり今日の虐政  
を如何せん哀き我が國情を憫察し玉えクーとの親話  
を聞ひて余も亦た坐るよ悲慨の思ひよ打ち沈みり  
印度の代言人

「バ子ルゼ」氏云く我が印度の如きも亦た訴訟裁判  
よ就てハ四局(勸解初等上等大審院)を設立して其の  
裁判上の形ちよ於てハ備具ハ則ち備具をと云へど

も其の實際の如きと之を如何とも云ふ可からざ  
るの情實ありて人民の惘悼實小惟れ谷まる也如何  
となきを其の裁判官ハ威を崇んで法を枉げ代言人  
ハ利を逐ふて人を眩し細民を衆を比して姦を計る  
を以て也然して其の災原を云へバ獨り其の裁判官  
よ在る也如何とかれむ我が邦の如きハ温度の高き  
百三四十度小昇りて蒸熱實小太だ甚き故よ他邦  
の人の來り住むの邦よハ非ざる也然るよ英人の如  
き好んで來住する所以んの者ハ唯だ利是を見り而  
已且え本邦(英國)ハ遠遠よして事多く曖昧小附する



も敢て之きを咎むる者无きを入滅の手段太だ行こ  
き易きが故に各官皆な蓄財歸郷の主義を以て來る  
也是を以て我が姦民その意を婦媮し其の代言人を  
事を附會して以て良民を擾惑し其の細民を衆を比  
集して以て良民を牽強するの間だみ於て訴訟百出  
して其の煩擾なる牧て舉ふ可からざる也終ふ之を  
を大審院に上告するも院尚不賄力を以て勝を得ま  
む姦民益々其の欲を放し良民専ら金持に在り多  
く其の害を受けて人民の悲惨怨曠又々牧て舉ふ  
可あらざる也近來英帝より若し印度に於て其の裁

判上は就き服承せざること有るときは我が本邦に  
來り訟ふよとの令あり是を以て實に其の情に相ひ  
耐えざる者仮令此の上を身代を破碎せるとも  
いのみも閣りきぬと云ふ情實のある者多くは金持  
に在り等或は五株六株申し合せて代言人を撰舉し  
て以て遠く數千里の彼の本邦(英國)に行り令む其の  
費用等實は莫大千萬なり之れが為め小遂は其の家  
産を破碎して斃る者天下比々少なりらざる也然  
るも姦民(代言人)益々此の弊を乗つ兩國(印英)の間  
に出没して我が人民を瞞著誑引して大ひは其の利を



計る者未だ牧て擧ふ可うらざる也然して此の難  
罹る者富人最も多しとせる也之れを以て我が邦の  
費弊日々に究りて其の止る所を知らず實に悲慨の  
至りし耐えざる也と云云龍云く前日は英國の「ペオ  
コンパニ」艦よて西印度の鋼買港より來りしとき同  
乗せし印度の「アボカ」(代言人)「ロツク」(クラーアロー  
ブ)と云ふ者の云く我れも今度訴訟六株を持して遙  
數千里の英國に至り留ること一年半許り(失費知る  
可し)ふして歸國をる也との話を以て今「バ子ルゼ」  
氏の話と徴して印度の内情實に氣の毒の至る存せ

らせし也之れは就ても我が日本の金持ち連中よ金さ  
急有れを邦を破れても我をて即ち大丈夫なりと思  
ふやうな坪違ひの考へハ止めなさいよ邦が破れと  
れむらるさくとも一番の難儀をる者ハ金持ぞか  
此の印度の實況を見て知り玉ふべし其の故は家  
大事なきは先づ邦を護る可し嗟呼  
印度佛教興廢の話  
一日余「バ子ルゼ」氏に問て云く即今五印度中の宗  
旨何の宗を以て最も隆盛なりとせるや「バ子ルゼ」  
氏云く今我が全國人民の信奉をる所の者之れを



ニズム宗と云ひ又た之をヒンヅル(印度の國教と云ふこと)と云ふ也釋迦教の如きを皆な去りて他國(北ハ西藏西ハスペリヤ比耳西亞東ハ緬甸安南支那日本等)は行き却て我ガ本國は於てハ之を信奉する者先いと云ふも可ならん欵余又た問て云く今氏其のゼニズム教と釋迦教と何つの項より興廢せしと云ふことを示し玉われりと云へバ氏云く余ハ宗旨者ハ非ざれど其の詳細ハ之を知らざると云へども凡そ歷史上と人の口碑ハ在る所を以て之を云へバ釋氏在存の時ハ天下靡然として其の風ハ郷

わざるもの先いと云へども佛后五百年の頃に至りて佛徒高慢自負稍や怠弛をるの際に及んで「ブラマ」(ゼニズム)宗の教徒涵養忍耐自ら勉むるの久き天下の人心釋迦教を放きて多くを「ブラマ」教に歸向せし也此の時中りてや兩派互に陵轢して往々諍論(或ハ其の太き大いなる戰伐に及ぶ者あり)も亘る(龍云く三十述記ハの五十九丁因明大疏三の二十八丁以下等其の諍狀を記し今氏の云ふ所粗不之れは當る歟)もの太き少ならずと云へども佛徒一般恒に敗を來りて聲價益々落沈せり中ふ於て一二の力ら



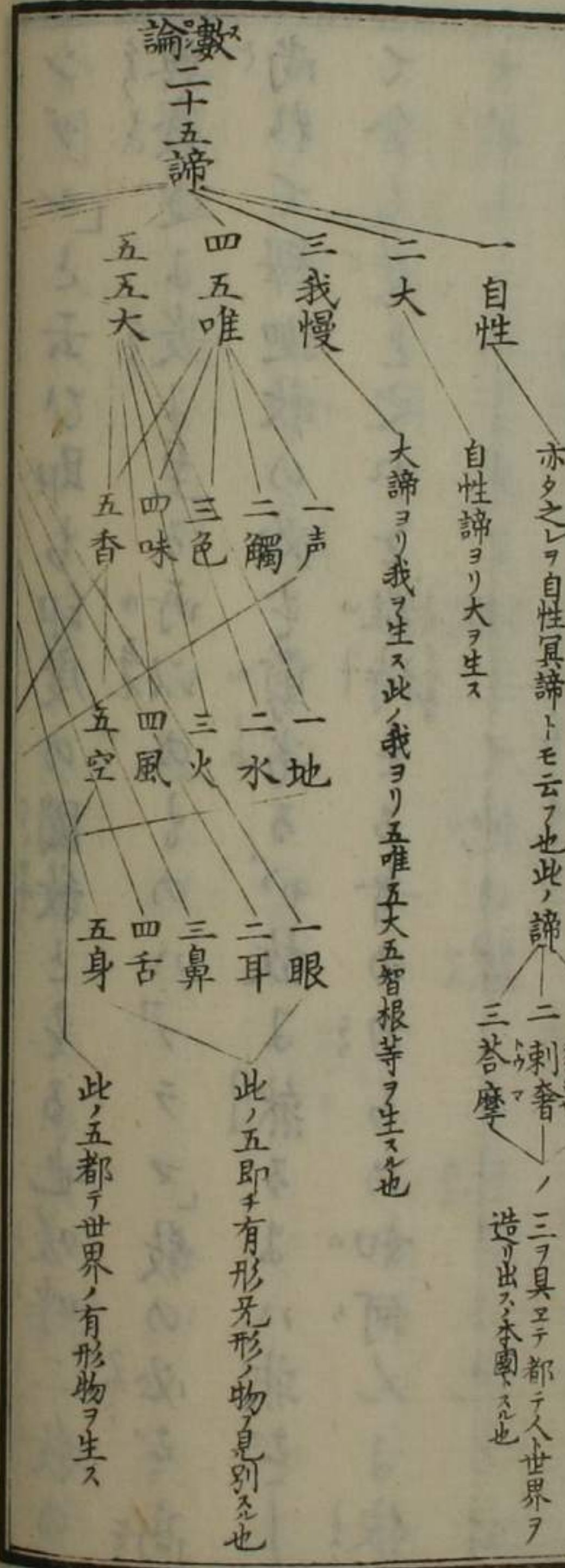
能く之を補くる(龍云く三十述記ハの五十九丁に  
云く世親勝義七十論を造りて彼の論は對し彼の外  
道を破すと云ふ者蓋し之を當る軟者ありと云ふ  
ども所謂大厦の崩るハ一木の支ふる所は非ざ  
千有餘年の今日に至るまで佛徒少くも之れを改む  
る所無く遂は此の委靡敗壞を來たり哀む可し彼  
の有名なる「アストロノミー、キルヘヤ、ゴルデンツル  
ム」等までも皆な悉く「ブラマ」宗の所有となりて印度  
全國の教權全く「ブラマ」教に歸向せり是を以て我が  
全國の人民日々は益々信奉して此の宗を稱して「ヒ

ンヅル」と云ひ即ち印度の國教とせる也嗟呼二教の  
興廢遂は爰に至る所以のものハ「ブラマ」教の必だ高  
尚れて釋迦教の必だ剪劣るが故に然るもハ非だ  
て全く是を之れを維持する者の力らの如何んは依  
て然るものなきを決して他の罪を非ざる也と云  
云龍曾て述記及び金七十論等を読む今「パ子ルゼ」  
氏の話聞き思ひ合せて大に感あり我が日本の宗  
旨者たるもの深く考ふられよう然して此の「ゼニ  
ズム」宗たるや段々調査する所は依れを概ね是れ數  
論派の宗義を立る者なり此のことハ我が別記に委



く乗載したまむ他日便を疎て迷を可き也  
印度「ピロソフイー」の略示

「ゼニズム」即ち數論「アラマ」家の所立槩意を示す左圖の如く(數論家も二十五諦を立て、世の中を支配する也)



數論家ハ思フ以テ我、体トスル也龍云此ノ我、ル者即チ大原文  
タ世界ノ大原也此ノ我ニ付テ印度「ピロソフイー」家ト歐洲「ピロソフ  
家ノ説左右有リ他日辨ス可シ此ノト金七十論ニ在リ

以上ノ二十五諦互ニ相ト生シテ人ヲ生シテ世界ヲ成ス也委クハ他日辨ス可シ

以上の二十五諦より由て先づ人と世界の出で来る所  
以んの大原(印度の「ピロソフイー」家之れを「ヤイナバ  
ルキヤ」と云ひ歐洲「ピロソフイー」家之れを「アブソル



「ト」と云ひ我が性相家之れを阿頼耶藏と云ふ也是  
き等のことと他日之れを辨ぜんともる也」と知り然  
して后ち人の真理を知り世界の真理を知りて政治  
あり宗旨ありと云ふ真理上の次第秩序を全知する  
也此のことと金七十論(數論)「プラマ」家の書(な)を見  
る可し今日を「ゼニズム」宗のことを云ふは就き數論  
家の主義を示す而已此の外は總て印度「ヒロソフイ  
」家は就ては釋迦及び勝論「プラマ」家等の「ヒロソフ  
イ」有ることを知る可き也今之をを辨むるは違ま  
非ざれど他日便を跋て詳悉に述を可し中々歐洲「ヒ

ロソフイ」の淺薄なる類よそ非ざる也然るは「バチ  
ルゼ」氏の話は由るは「ゼニズム」宗の如きは印度全  
國は於て凡そ分れて三十餘派とあり何れも皆な信  
奉隆盛なりと余前日は「ゴルデン、ツルム」の寺に詣せ  
し時その拜至人の多き肩摩肩擊實ふ人の堆をなむ  
導人の云く毎日午前は恒は此の如しと然して荀  
も男子たる者と亦た必む其の額に白粉を以て三  
三三川二川(是れは鼻の形は引き下を)此の如き  
線を描けり是れ皆な同宗異派の徴とをる也と我れ  
銅買より爰に達する凡そ千數百里その見る所の人



苟も男子たる者ハ此の徴一を画りざるハ未だ一人も之れ有らざる也且も人民の實況を見るハ實ハ宗昔信仰の厚き歐洲と云へども是れも及むと思ろくも也扱て又此の外ハ内状ハ就て土人の嫁娶出誕葬儀祭典寺の生活等より耘耕工商衣服食物及娼妓芝居等のことと至るまで委く乗記したくそ有れども餘紙も先く亦ハ發免の遲回せんことを恐ろくが故も今ハ之を略し他日復た續編を造りて以て之れと述せんともる也先づ采り調べも粗ぼ其の概數を得たれを是れより「バ子ルゼ」氏の話の如

く中天竺の方角向ひ佛墓の所在を弔問ね參らる可しと思ふバ余「バ子ルゼ」氏ハ向ひ是れまでの荷恩を深く陳謝し且つ其の意を述べけむを氏も亦た之れを許されて云く師是れより中天竺も向とんとならバ再び恒河を乱り「アルラ」を経て「バト」ナに至り爰ふて能々尋ね玉ハ或ハ其の方角も解りつ可き歟と懇々其の路次を指示されけむを翌二十八日午前第七時比拿力府を發して再び恒河を乱り午後第三時アルラは著し今夜も爰に宿し取り敢へず佛墓の方角を咨問せしかども語さるも確乎は通ぜさ



れハ解る可きやうも死ければ翌廿九日早速爰を發  
一「バトナ」(爰を即ち中天竺の入口也)の方急ぎけり  
午后四時過ぎ同所著一今夜ハ又た爰一宿一け  
れハ宿主の僅ハ英語を話す由て即今此の中天竺  
ハ於て釋迦佛尊の墳墓を掘り出たと云ふハ果  
て何れの地なりやと云ふことを英語の中手合ひ  
摸合ひを雜ぜ加ゑて尋ねければ主人僅ハ其の意を  
了せしや其れを「バル」シラガチ「ガヤ」の間は行て  
尋ねよう」と云われ一故ハ太だ便り死き答えなれ  
ども何ハ兎も角この言を方針として行く可」と決

したり

以下正く佛尊の墳墓を偵尋せるの話

翌二十三日「バトナ」を發せり付き是れまでを多分  
鐵道に乗じて来りしなれども今ハ專ら釋尊の墳墓  
を弔問し參らる可ければ鐵道而已にて沿行して  
とても偵尋の詳細と悉きこと能はざれむ是れより  
ハ或ハ牛車(馬車)之を先(一)を用ひ又たハ步行をも  
為可」と路次の行計を議定し先づ取り敢えず牛  
車一輛を備ひ「バル」や「ガヤ」ハ西南の方ハ在りと聞  
けバ其の地方を行く可」と方針を定めて午前第八



時「バトナ」を發して悠々たる知らぬ田舎の方を向ひ  
つ、「ガヤ」の里をい何ふ行くや釋氏の墳墓も何れも  
在りやと英語を以て尋ねつ、山を越る水を渉り村  
あまを尋ね人あまを問ひつ、も尋ね行く程も日も  
早や西山も暮きければ今日を速く宿も可くとて山  
の手の小村なる百姓の家を叩いて我々ハ日本人な  
る今夜の一宿をさせ玉あると英語を以て懇よ依  
頼せしうども最早や此の邊を英語さるも通せざる  
もやさつをり解らぬ体に見えければ今を詮方なく  
日本語を合ひ摸合ひを打ち雜えて述べけきと却

て其の意を了せしよや何もやら解らぬ言を云ひな  
がら手を振て相ひ断る体なれば強て頼む可き術  
なれば其れより四五家も依頼せしうども如何が  
思これ一や皆な悉く断りの体なきは黒崎余は向ふ  
て云る、よとケ程までこと分けて依頼をりよ承  
引の先ければ最早や午后第十時過今夜も如何が  
玉ふや到底野宿でもなされる歎兼て承る所も由れ  
む猛獸毒蛇の憾れも有れむ如何がなされる積りな  
りや實は惻り入りますと徐々不足を鳴らし掛けら  
まし故も余笑ふて云く左而己悚れ玉にざれし我

天竺行記 卷之三  
四九



れ必む氏を以て安眠させ参らる可し抑も猛獸毒蛇  
 の害等の必竟トて凡人小人の悚るる所の者ふして  
 大人豪傑の敢て屑とせざる所なれば令ひ彼れ来る  
 とも我を必む宜く處を可し氏決して悚るること勿  
 れ若しや宿めて呉れぬときハ野でも山でも草蓐石  
 枕何の安眠されぬことや之れ有らん都て我れは托せ  
 玉忽ち然し乍ら是れまづ専ら黒崎と言ひ令め  
 たり此の上忽ち我れ我が膽略を以て數言間も宿ハ  
 借り受け申さ可し氏且く竦てと云ひ捨て更し一方  
 も行て我が天然の日本語を以て同く手合ひ摸合ひ

を振り回して依頼せしかバ速疾り承引致されし  
 り是れ即ち日本語手合ひ摸合ひと云へども得失ハ  
 其の使ひ方たは在り諸君一笑せよ即ち黒崎と呼ん  
 て云く見よ宿ハ既し借り受けたりとて相ひ共し其  
 の家の柴部屋体の内ちも投宿して何しハ兎も角大  
 ひも安心致したり宋の文天祥が是即我安樂園と云  
 されしを思ひ合せて大笑しけれ然るも小麥の莖  
 たる物も白砂糖を掛けざる食物を與えられし其  
 の味ひの佳なること宛も漢の文叔の滹沱河の麥飯  
 こそ相ひ譲らざる也今日ハ非常に配慮して頗る疲



勞せしるべ端し無く柴部屋の内ちよ沈睡せり

翌朝に至り盥嗽既畢りて主人又と例の食を来り

呈して手合ひ摸合ひと共よ何よやらチンブンカン

を述べれどもさつそり解らず然し乍ら粗末な思合

物を差し出さし氣の毒なと云ふの体よ見あけせど我

れ等も亦と英語を以て昨夜来の厚意を陳謝しけを

を彼れ亦と語い分らねども粗不其の意を解せし体

よて一坐の對交太ど整頓せり稍やありて我れ等主

人よ向ふて(英語を以て)釋迦の墳墓ハ何れよ在きや

又たガヤの里ハ何れの方よ在りやと尋ねければ彼

れ全意を解せざまども唯ぞガヤと云ふ名而已を分

りし由しよて遙り西南の方を指して云く「ガヤ」と是

は於て我れ等茫渺中よ一つの行路を得たる思ひよ

て深く主人の懇到を謝し其れより名さへ分りらぬ

村を發して之れより前きハ長路悠悠々唯々手合ひ摸

合ひと諸共よ「ガヤ」ガヤと而已尋ねつ、山を越え水

を涉り日落れば孤山の下は宿し日出れを一水の邊

を發し宿々既よ五宿遂よ十二月三日午後第十時頃

ガヤの里よ着しけり(路次の苦惱等ハ爰よ詳悉不可

わらざる也)扱て其れより兩三家と叩ひて一宿を依



頼せしは例の如く皆な相ひ断せられけまども黒崎  
も宿采りの大分上手に成りたれを百方遂は一つの  
納家体の者を借り受けたり是は於て笈と下し坐を  
占めて先づ「ガヤ」まで来りし上は佛墓の有死も日  
らどして決を可きことの近きを悦びつゝ遂は洋種  
は巻りまて寝りたり

正しく釋迦佛尊の大墳は詣至る話

明て四日の朝第七時起床し食事畢りて然して后

ち余黒崎は向ふて云く史は云く白虹日を貫くとハ

人の至精遂は達するの謂ふして凡そ人苟も精神は



田園八道龍師自ラ天笠





當圖ハ道龍師自ラ天竺ヨリ持來ラル、所ニシテ生誕テ之ヲ親寫ス 玄三堂録山

此ノ書中ニ箱入スル所ノ當圖ハ餘リ大相ニ付キ寫真  
權ヲ願ヒ別ニ縮圖ニ致シ所望ノ人々ニ附與ス可シ



細家体の者を借り受けたり是は於て笈と下し坐を  
 占めて先づ「ガヤ」まで来り上ハ佛墓の有死も日  
 らどして決を可きことの近きを悦びつ、遂は洋種  
 は巻りきて寝りたり  
 正しく釋迦佛尊の大墳は詣至せる話  
 明て四日の朝第七時起床し食事畢りて然して后  
 ち余黒崎は向ふて云く史は云く白虹日を貫くとハ  
 人の至精遂は達せるの謂ふして凡そ人苟も精神あ



らば何事か成らざらんや我を等去日鋼買と發して  
以来爰は達を幾んど千八百七十八里も有る可  
此の間の苦心焦慮亦と果して幾子ぞや然るは死事  
遂は爰は達し得る者ハ唯だ是れ一つの精神ある而  
己氏其れ悔れと勉よ佛墓の有死を決することハ正  
く近きは在る也と黒崎も大ひは感奮して云く諾我  
れ將は勉めんとする也と是は於て宿の主人を呼び  
て云く我々を「イヤツパンニス」(日本人)ホして釋迦  
佛尊の墳墓を弔問し參らせん為り來れり庶幾く  
を御墓の所在を知らせ玉えり」と英語或ハ獨逸語



と打ち交えて陳しければどもさつむり解らず黒崎云  
 く此く巨細も述ると云へとも彼れ少くも其の意と  
 解せざれど如何が致す可きやと云これ故も余云  
 く此の上も百事我れも任し玉も我れも問出を  
 可し彼れ亦た犬も非ぞ猫も非ぞ均く是れ人なまば  
 仮令ひ言説の通ぜざるも何んの其の意の致されざ  
 ることろ之を有らんや是は於て余自ら日本語中  
 手合ひ摸合ひを差し加えて種々之れを咨問せと云  
 へども彼れ尚ほ之を解るること能はず實は百尺  
 竿頭之れと如何せんと思ふ所より一種の工夫を回

ら墳墓の形ちと画して「サキヤモニ」「サキヤモニ  
 」と云つを彼れ稍や之れを解せし体もて頻り小點  
 頭しける故も然らむ其の地方は行く可し牛車一輛  
 を傭ひ玉これと「ロピ」(印度の壹圓)を出して種々依  
 頼しければども其の意少く了し兼ねし体も是  
 れ亦も牛車の形ちと画ひて示しけむバ忽ち了解せ  
 し姿もて大ひは笑ふて點頭しつゝ戶外を指して出  
 て行く且ありて一輛の牛車を率ひ来り之れも乗  
 れと云ふの形ちと示す然らば之れも乗れば宜しひ  
 欵と手合ひ摸合ひを以て尋ねければ唯も點頭して



遙は西南の方と指ざりける故は左をれを其の地方  
よこそ或ハ御墓の在きならんと想察せしうぞ免も  
角試みは行く可しと卒然ながら其の車は乗れば主  
人其の丁夫は向ふて遙り西南の方と指ざり何ふや  
ら云ひ付けたれを丁夫も了養せし形ちよて我等を  
引ひて陋巷の外へ出でて行く實は如何んとも云ふ  
可からざる漠然の至りそがし是れより行くこと數  
里にして野外と轉じて山手の方へ向るとをる時  
黒崎余は向ふて云く北畠君是れよりハ何所へ行く  
ので有りませやうさてハ徐々例の不足を鳴らし掛

けたりと察せし故は余恬然とて云く御墓の方へ  
行くの志やと彼れ云く愈々御墓が分りませやう歎  
余云く未だ分らぬの志や彼れ云く分らぬでも惻り  
入ると余云く分らぬ故は尋るの道やと一論終り稍  
やありて彼れ復と云く凡そ御墓を幾里計り有り  
ませやう余云くさきとよ今ハ獨逸英語の力らも  
盡き果て丁夫はさるも咨問を可き術ての死れは百  
里あるやら二百里あるやら唯ど茫々として知るよ  
由し死し嗟呼丈夫苟も行く可しと決したり千里萬  
里も何んの辞をることり之れ有らんや氏其れ細論



さること勿れと云ひつゝも益々山手の方へ行く程  
 は午後第三時頃連山の麓へ衝き出でたる一つの土  
 山の下に至りたり丁夫爰に於て牛車を止めて何  
 やらチンパンカンと云ひつゝも手を振り回して車  
 より下りよと云ふの形ちを為さ故に何事やとん  
 と思ひつゝ車を下りけれを我れは従ひ来れと示さ  
 の体かれを唯ぞ其の云ふまゝは是れ従ひ其の山の  
 上へ登れを豈に圖んや土山よを非ぞして宛も周  
 圍二丁餘り有りつ可き大ひなる摺鉢の端の如き所  
 へ立つたり然して其の底を見るは宛も塔の形ちよ

似たる石造の建て物ありて近頃土中より掘り出  
 せし者の如く尚も男女百二三十人計り土を掘り土  
 を荷ひ鞆掌絡繹たり余丁夫は問て云く之れ果して  
 何の物ぞや丁夫何よやら云へども更に分らざる故に  
 黒崎に向ふて云く兼て聞く所は由れを即今釋尊の  
 墳墓を掘りて居ると云ふ蓋し之れならん歎然し  
 墓にしては餘り大ふれを亦た塔ならん歎何よせ  
 よ彼の多人數中よを或は英語の出来る者もあらん  
 免も角行ひて咨問せられよと云へば黒崎即ち諾し  
 て直ち石階(四十五六段も有る可し)を下り彼の群



中より入りて往々咨問せしども更に分らざ余端の上より在りて呼んで云く黒崎果して如何ん黒崎の云く未だ余云く速くは勉旃よやと勵ましければ彼れの飛回ること宛も發雷の如く稍やありて彼の小高き所は少く偉大なる黒人(印度人を皆な黒人とする)の種々指揮を看見占て問訊しければ天幸も彼の黒人の英語を自在に話せり即ち云く是れを斯れ釋尊の大墳墓なりと是は於て黒崎手を擧て大呼して云く是れ即ち釋尊の大墳墓なりと余之れを聞ひて宛も狂人の如く石階と兼下りて思ふも黒崎

を懐き抱え跳て云く嗚呼大聖世尊の墳墓なり大聖世尊の墳墓なりと多日の千苦を打ち忘れて喜跳悦躍相ひ止まざれば土人之れを周匝して太く奇怪の看を為しよける也稍やありて黒長云く我れを即ち當修營所の奉行あり先づ我が修營小屋ふ来り玉えりしとのこと故は取り敢るむ其の小屋は誘れて狂氣漸く清整端正なりさて此の所はもと加耶の聯地ふして佛陀加耶と名くと加耶の里より十二三里も有り云ふ也  
黒長我々は向ふて君等は何れの邦の人ふして何ん



の為め爰ゑい來りしと問ふれ故に前日も銅  
 買の「アデレツ」フエ及び比拿力の「バ子ルゼ」氏等よ  
 答ふ如く陳しければ黒長大い感喜いたされて  
 云く然らば君等ハ日本人よして我が釋迦教を信奉  
 せらぬ人なる歎我は即ち「タークベンゴ」と云ふ者  
 ありて此の大墳修營の奉行を命(印度政府より)せら  
 れし者あまバ之れは關せし事ふれを渾て配慮し參  
 らす可し何んありとも托せられしと懇に云ひ呉  
 れける故に我れ等も深く陳謝し然らば何んとも  
 なく先づ釋尊の大墳は詣せ令め玉ふれよと云へば

然らば我れ自ら指切を可し來り玉ふると云われ  
 し故に余即ち法衣を着し經卷を持して大墳の前  
 至る大墳我然として其の高さ宛も八丈餘其の周  
 圍十餘丈も有る可しと思はる實に世界無比の大墳  
 と云ふ可き也(余曾て佛蘭西に於て拿破倫の墓を見  
 る人皆云く世界第一なりと今此の大墳は比さる  
 る其の細小なる論むるは足らざる也嗚呼釋尊威徳  
 の巍大なる推て知る可きあり)迺ち其の墳戸より凡  
 そ一丈七八尺計り奥に入る其の奥中太ど暗淡糶  
 糊たり然るは其の正面は三尺四五寸許りの黄金の

天竺行記の四見

卷之三



釋尊を坐し其の下たる圍大なる穴を鐵の圓板を以て蓋ふて有り云く此の内は釋尊の金棺を收むと之れを聞き余感然として立ち法然として泣いて拜して云く嗚呼我き等六十年来徒ご佛尊の威名を聞き今日爰よ來りて此の親容を拜き我き等感喜の至り且つ極まる豈よ車載斗量も可んや即ち彌陀經一卷を展誦し深く大育の荷恩を敬謝し奉りつ

年を経て名のみ残りし加耶の里よ

今日みりとけの痕と問ふ哉

と杜撰らぬ卑言と陳みたり此の中り名のみ残りると

云ふく前日小云ふが如く古昔し釋尊在存の時の山川國都の名(サンスクリツトの名)を以て何よを云ふても少しも解らざ(今ハ都て「パリ」の名よ變りし故は衰頽せしと云へども加耶だけ今尚不其の古名と存るが故よ名のみ残りると云ふ也此の名が我々の此の偵尋の原引となり也其れより左の方よハ南門右の方よハ各國天子(スベリヤ「ベルシヤ」等の建呈されし碑石(三行)なりて十五ヶ所あり之れを寫真中よえ死き也)等を點見し畢り(之を今爰よ一々乘記をるに違まあらざれを聞んと欲する者來れ



先づ「タークベンゴ」氏の小屋を引き取り日も西山よ  
畜うまきけれを明日復またと来る可べしと約やくし今日ハ夜をこ  
めて加耶の里まで立ち帰りより主人も大に族まち訖と  
び一ひと体なまし一ひと所その配ふり慮りは由より正ただしく佛尊の大墳  
を拜まがせしことを種あま々あま形容けいようして深ふかく其の厚意こういを謝あやし  
遂すなは納屋の内うちよを卧ふしたりけり其の大墳の形かたちハ  
寫真しやくざんを爰こゝに繪えして劉覽りゅうらんは附つき其の中うちの第一圖だいいちずハ五  
年ごねん以前いぜんに堀ほりり出でせし儘ままなり其の第二圖だいにずハ五年以後ごねんご  
修營しゆえいの形かたちも也なり委詳うゑしやうハ他日たにち辨わむ可べき也  
翌五日あしたごにちハ天氣てんき晴はりて再またび佛陀ぶつた加耶かや小行せうぎやうく可べし

とて昨日けふの如ごとく牛車うしぐるまと云いへを主人も既すでに暗記あんきして  
直ただち車くるまと率ひきひ来きり即すなち之これれを乗のりて加耶の里かやのさとと  
ぞ出でりけたり今日けふハ昨日けふより打うちて變かり生路なまぢも即すなち熟あく  
路ぢと成なり主丁しゆぢやうの間まも亦またと知しり合あひけれハ路ぢも意い外がい  
に増まり采とりて第十二時じふにじ頃ころよと大墳おほふみの下したとまで達たち  
たり黒長くろぢやう「タークベンゴ」氏しも太ふと族まち訖とびてぞ居ゐら  
れたり  
「タークベンゴ」氏し大墳おほふみ瘞堀せきほりの槩おほ話わ  
余あ「タークベンゴ」氏しは向むかふて此こゝの佛尊ぶつそんの大墳おほふみハ即すなち今  
堀ほりり出でしたと云いふハ真まな多おほ欵くわん此こゝのこと若もし真まなら



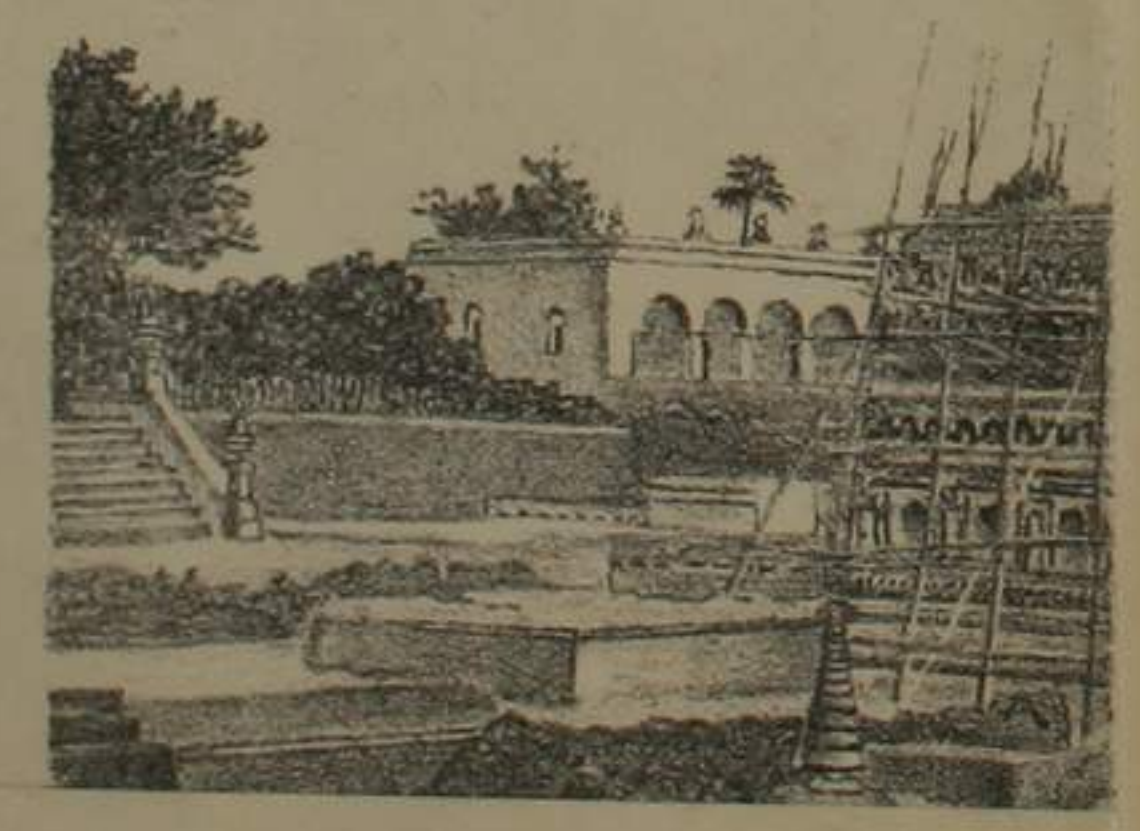
を何つの頃何んの由るを以て埋められやと尋ね  
ければ氏云くさればとよ此の大墳を堀り掛けし  
二十年前のことなまとも正しく堀り出したるハ五  
年以前のこと也然るは其の埋められしを今より千  
九百七八十年のことよして其の所以ん如何んとな  
れば「サキヤモニー」(釋迦)教徒と「ブラマ」教徒の間だ  
於て法義上の諍論と起し(此の話金七十論三十述記  
因明大疏等の説と合して益々徴するは足る也)兩派  
互は凌轢の末遂は印度全部の戦となし釋迦徒の  
敗績壊散せしとき「ブラマ」徒の来りて此の大墳を

碎せんとするは餘り大墳の堅牢なるが故は卒然之  
れを瘞埋して去りしと也此の時中りてや一二人  
の力ら之れを補援する有(此の話亦は三十述記の説  
は合さりと云へども之れを挽回すること能はざる  
は今日の如く陵夷漸廢するに至れる也然るは今よ  
り二十年前英國天子「トロギー」(古物を存保する學  
文など)學の意は由りて命を印度政府に下して此の  
大舉あるに至る是れ即ち此の大墳の瘞堀する所以  
んの槩數なりと云云此の話前日比拿力府の「バ子  
ルゼ」氏の話と亦は全く同一なり我が佛尊の大教を



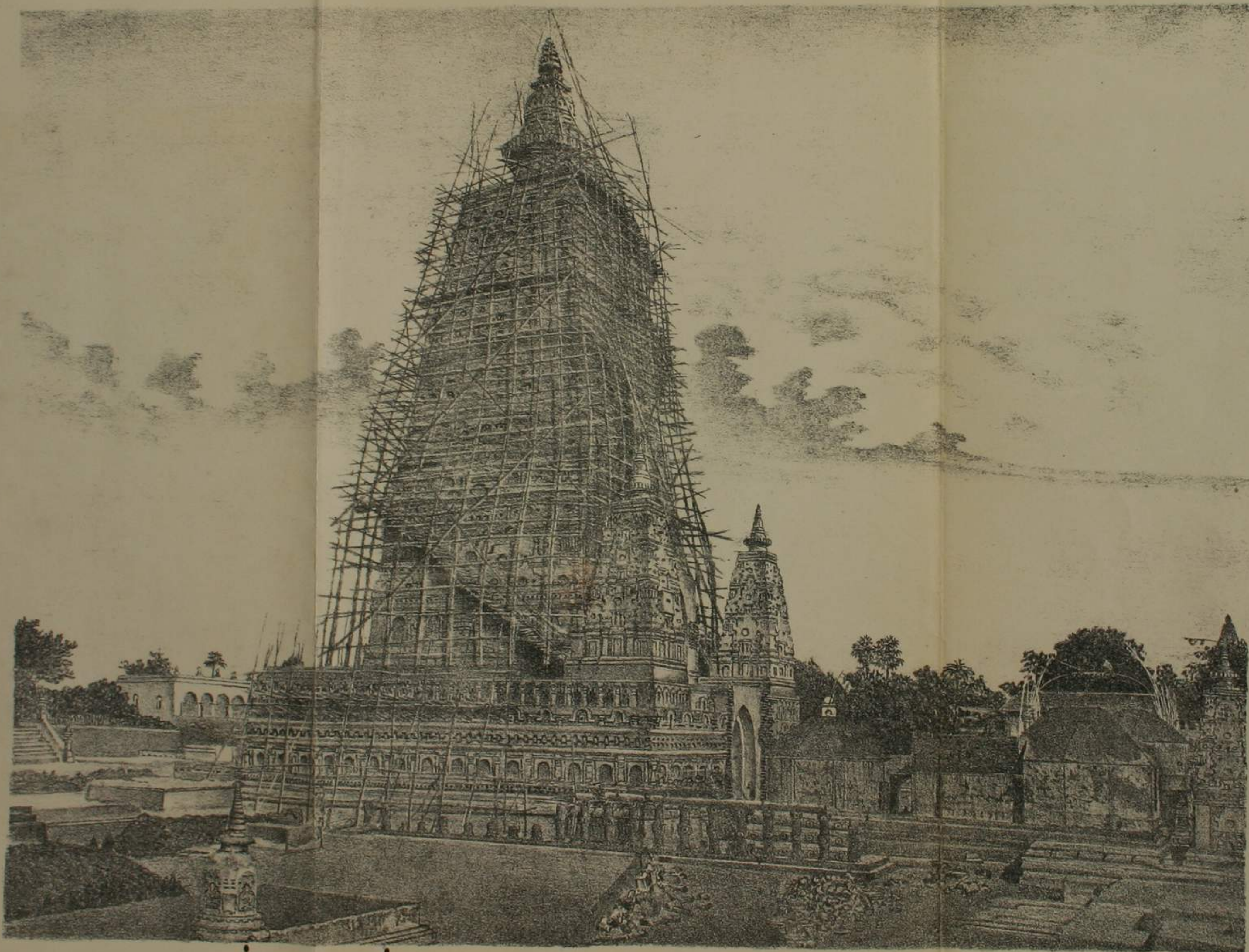
遵奉する者果して之れを何よとる思ひ玉ふぞや  
大墳の所在を人の知らざりし所由

余ダークベンゴ氏ゴは言て云く我れ此の大墳と弔問  
の為めよと頗る若干の勞苦を嘗めたり我れ曾て歐  
洲在留中獨逸の「サンスクリット、プロフェツシヨル、  
オルテンブルヒ、魯西亞ルの同く「プロフェツシヨル、  
トベール、バトリツチエエ」各々印度カに在學すること多  
年と云ふ也及び英國の同く「プロフェツシヨル、マク  
スミルレル氏ル」此の人ハ印度學に從事すること數十  
年と云ふ也等と誌て此の大墳の所在を質問せしよ



當國ハ道能師自ラ天竺ヨリ持來ラル、所ニシテ生語テ之ヲ觀寫ス





富國ハ道能師自ラ天竺ヨリ持來ラル、所ニシテ生護テ之ヲ觀寫ス  
 富國ハ道能師自ラ天竺ヨリ持來ラル、所ニシテ生護テ之ヲ觀寫ス  
 富國ハ道能師自ラ天竺ヨリ持來ラル、所ニシテ生護テ之ヲ觀寫ス

此ノ書中ニ箱入スル所ノ當圖ハ餘リ大相ニ付キ寫真  
 權ヲ願ヒ別ニ縮圖ニ致シ所望ノ人々ニ附與ス可シ



スミルレル氏(此の人ハ印度學ニ從事をること數十  
 年と云ふ也)等ニ就テ此の大墳ノ所在を質問せしむ



皆みなな云く我れ等在印中佛墓の所在しよざいに付てハ種々之れ  
を捜索そうさくせしりども少くも之れを知る由よし死ちり  
一也嗟呼物換り星移りて二千五六百年来の今日多  
くハ消亡碎滅しょうぼうさいめつせしならんと云ふ也其の上る前日ぜんじつは  
西印度せいんどより来り鋼買がんにの「アデレツフエ」及び比拿力べなりの「バ  
子ルゼ」氏し（各々印度中の識者等しやくしやとう）も咨問しもんせしり亦と  
皆みな云く我れ等印度いんどに棲息せいせきせること殆んど六十年  
未いまど其の大墳の所在しよざいを聞知きんちせざ蓋し消亡碎滅しょうぼうさいめつせし  
ならん歎と嗟呼あはれ此の如き有名なる大墳おほいづみふして他邦たはう  
人の之れを知らざるハ且まく措かく今土人いまどちんふして之れを



知らざる者の我れ太だ疑恠は耐えざる也氏其を之  
れを如何んと思ふるやと云ふを「タークベンゴ」氏  
云くさまむとよ其を土人ふして尚不之れを知らざ  
り一所以んの者其の所由二つ有り其の一つは又一  
く瘞埋中よ没するが故は知まらず是れ一つ也其の一  
つは土人の為めは塗抹され一故は知れど是を一つ  
也此の二つの所由を以ての故は土人尚不之れを知  
らざ況や他邦の人よ於てをや然るは其の瘞埋中よ  
没するが故よと云ふ者ハ辨を疎たざと云へども其  
の土人の為めは塗抹さるゝが故よと云ふ者如何ん

となれば抑も此の大墳を埋没する殆んど其の全体  
を埋めて塵よ其の小尖を顕を而已然るは此の佛陀  
加耶村ハ即今民居二十七戸よ過ぎむと云へども  
太古村ふして村民（口碑）恒よ云く大聖佛尊の大墳  
ハ即ち我が村よ在り上古大戦（佛徒と「ラマ」徒の戦  
ひ也）の時賊の為めは埋没さきて今尚不塵よ其の小  
尖を出して彼の土山の上よ在り是れ即ち我れ等  
祖先来云ひ傳ふる所の確説なりと然るは其の輪村  
の人民等皆な之れを打ち消して云く彼を云く大聖  
佛尊の墳墓ハ我が村中よ在りと何んぞ自ら驕るこ



との太だ甚しきや其の小尖の如き者ハ必竟トて他  
 の古碑の存をる而已と是れは由りてや適々十里二  
 十里外の人々其の輪村の人と逢ふごとと問ふて云  
 く佛陀加耶村はと大聖世尊の墳墓有りと果して真  
 なる歟即ち輪人等皆な云く其れを是れ佛陀加耶村  
 民の私言ふして實に來るは足らざる妄説なれを敢  
 て惑ふこと勿れと塗抹されたり是は於て十里二十  
 里外の人民尚不此の塗抹の為め誤まらる況や百  
 里二百里外の遠人及び印度全國の人民は於てをや  
 是を即ち我が大墳の久しく埋もれて知をざる所以

ん也然るは今より二十年前英國の天子佛陀加耶人  
 民の口碑は基き印度政府は命トて試は之れを掘ら  
 令めたり此の間だは於て種々事情之れ有りと云へ  
 ども遂は五年前此の大墳を見發せり然るは印度の  
 遼たる大國なまは尚未だ悉くハ之れを知らざる  
 也是れ即ち師の偵尋をる特は勞苦せられし所以ん  
 也  
 龍云く是れは由て之れを云へば支那歷代の三藏等  
 の天竺に入るも未だ此の佛尊の真墳は拜詣せし者  
 ハ蓋し一人も之れ非ざる歟然るは我を之れと發見



さるの今日ふ中りて直ち拜詣をることとを得る者

い實は千歳の一遇と云ふ可き哉

大墳の右側は龍が碑文を建る話

余ダークベンゴ氏は請ふて云く我れ爰より來りて此

の大墳は詣をること、我が日本建國以來の大初な

れを庶幾くハ此の時日を石に勒し之れを大墳の側

に建て、日本人も亦に來至せることを全地球上の

人は示めさんと欲を氏其れ之れを許をや否や氏云く

我れ將は他日之れを政府に云ふ可し師其れ之をを

建て、君の清操と千歳不朽を示めし玉えりしとて



さるの今日小中りて直ち拜詣ることを得る者  
い實は千歳の一遇と云ふ可き哉  
大墳の右側は龍が碑文を建る話

余ダークバンゴ氏に請ふて云く我れ爰に來りて此  
の大墳は詣るること、我が日本建國以來の大初な  
れを庶幾くハ此の時日を石に勒し之れを大墳の側  
に建て、日本人も亦に來至せることを全地球上の  
人は示めさんと欲む氏其れ之れを許さや否や氏云く  
我れ將に他日之れを政府に云ふ可し師其れ之を  
建て、君の清操と千歳不朽を示めし玉えりとして



日本開闢來

明治十六年

余始詣り

新尊墓前

道範

十二月四日



幸さいわいの六尺有餘ありまの堅石けんせきを附與つらされける故ゆゑに左ひだりの小文せうもんを記しるしたり（即今大墳の修營に付石工の爰に在るを以て彫事幸に速成せり）

日本開闢にっぽんひらく以來いらい余始よそはじめて詣まゐり于釋尊あつゝもん之墓前のむね明治十六年十二月四日道龍

右みぎぎ碑石ひせきハ佛尊大墳ぶつそんたいぼんの右側みぎがはに建てたれむ他日我たがが日本人にっぽんじんの重ねて行く者ものあらば幸さいわいに一覽いちらんせよ即ち其の該圖がいずを今爰いまこゝに繪示えいしを是こゝにハ印度いんどうの白布しろふを以て其の碑面ひめんを覆おほひ余われ自ら之これを摸寫もさうし（る者なり）の  
ダークベンゴダークベンゴ氏しより大墳たいぼんの寫真しゃしんを附與つらせらるゝの



右ぎ碑石等のことよ付き日々加耶より爰に來往せ  
一が先づ碑石も之れを樹立いさし且つ大墳墓の事  
歴等も其の槩數ハ之れを了知したれむ此の上を  
何卒ぞ大墳墓の全形を寫真み來り携へ歸りて人々  
よ示をならば其の欣喜必ぞ若干ならんと思ふ故よ  
ダークベンゴ氏ハ此のことを委く縷陳して依頼せ  
しぞ氏云く之れを寫すことを別は差支ハ之を死  
しと云へども此の地を此の如き草茫たる田舎のこ  
となきぞ寫真師などハ一人も有ること無し若し之

を招けんとせるときハ數百里の外クベンギボー  
ルに至りて之れを覓む可し然らば則ち聊爾のこと  
よ非ざる也如うぞ師且く疾て庶幾くハ師の國土番  
地を我れハ記附せられよ他日營事終らば我れ(ダ  
クベンゴ氏自ら寫真を能くせ故よ云ふこと然り)自  
ら之れを繕寫して必ぞ若干葉を送致を可しと余云  
く氏の芳意辱きを則ち辱しと云へども所謂る遠水  
不救近火(貞觀政要の言)とて遠方の水も近所の火事  
を救ふ能くざるの類ひよして他日の若干葉ハ今日  
一葉の感憤を與ふるの速らあるふ如うされば仰ぎ



願くハ氏我が為り一葉の親寫を勞せよと云ハバ氏云く師の非常の渴望なれを如何んとも為可きなれども其の技藥(寫真藥)ハ今日氏の手許に死一故は然ッ云ふを得るとても同く之れを「ベンキポール」は覓む可きなれど是れ亦と聊爾のことと非ざる也既は五年前のことなり一が我れ自ら十葉の寫真を米り其の二葉ハ此の大墳の戸上は掲示一其の他ハ英國天子(二葉)印度政府(二葉)某れ皇族(二葉)と差出し残る二葉ハ我れ自ら之を所藏せり今師渴望の太だ甚一き我が所藏を呈ど可一兩日俟ち玉る米り調べ參

ら可一とのこと故余爵然として云く氏若一其の鐘愛を賤ハ實は敬戴の至り也幾日よても俟つ可一として此の日ハ亦と加耶の里を歸りけるさて三日の後ちダークベンゴ氏其の藏せる所の寫真二葉を附與されり(今爰は總示せる所の者即ち是をなす)是は於て余之れと大謝して云く是を此の二葉を豈は唯と隨珠(隨侯の珠)和璧(和氏の璧)のみならんや我が三千八百萬人の大墳坐拜の嘉祝實は敬荷の至り耐るざる也



る所の者よりして其の第二圖を五年以後に修營する所の者也

大墳の石片を奉持して歸朝するの語

頃日來碑文及び寫真のことより付き日々執掌中より修營小屋の側らと照顧するに墳墓の石片堆をなす最も嚴重之れを保護する有り一日余其の内より入り一片の石を采りて「ダークベンゴ」氏に言つて云く庶幾く此の一片を賜ふんとを氏莞爾ふて云く師何んぞ存りて覓むることの豪氣ある其まは契りませぬと余亦と笑ふて云く凡そ物を覓る豪氣は非



當石ハ二箇共ニ釋尊墳墓ノ石片ニシテ同シク師ノ持來ラル、所ノモノナリ生話



り一片の石を采りて「ダトクベンゴ」氏に言つて云く  
 庶幾くハ此の一片を覘せんことを氏莞爾ふて云く  
 師何んぞ存りて覓むることの豪氣ある其まハ契り  
 ませぬと余亦と笑ふて云く凡そ物を覓る豪氣ハ非

此ノ書中ニ箱入スル所ノ當圖ハ餘リ大相ニ付キ寫真  
 推テ願ヒ別ニ縮圖ニ致シ所望ノ人々ニ附與ス可シ



當石ハ二箇共ニ釋尊墳墓ノ石片ニシテ同シク師ノ持來タル所ノモノナリ生誕テ之ヲ親寫ス

玄々堂松田緑山



らぞんを其の大欲を果すこと能はざれども也氏其れ  
之を賤る氏云く今余が契らぬと云ふ者ハ敢て  
クベンゴが私言ハ非ざる也一ハ即ち政府の猥り  
ハ濫佚を可うらざるの命有り一ハ修營の秩序ハ由  
りて其の罅漏を補直を可きを以て也と余云く氏の  
云ふ所の者ハ小理ハ由る我が覓むる所の者ハ大理  
ハ由る也必竟トて大小の分ある而已我々他日云ふ  
可一氏其れ少く考る玉る一とて此の日も亦之  
加耶の里を歸りけり  
一日余クベンゴ氏ハ言つて云く此の回も氏

天竺行路歌所見

卷之三

六十七



懇助こんすけより由りて我が調査きさつの事都て完全くわんぜんなることを得  
たり由りて我れ将まささよ別べつを成さんとす實じつは戀々こひこまの  
至り耐たえざる也之れは就つき前まへきの石のことも付  
て今一應理ひとしやうりの大小を陳ちんせんとす其の采不さいふと君の意  
は任まかせ可まかし而已凡まそ事物じぶつの間あひごは於て小理せうりを知り  
て大理たいりを知らざる者ものを細人さいじん曲士きよくしの為とせざる也  
又また大理たいりは由りて小理せうりとも屑くせとせざる者ものを大人  
豪傑ごうけつの為とせざる也然るは今氏の云ふ所の者ものを  
小理せうりより其の大理たいりの如きを太たいど未いまど一也如何いかん  
となむを今氏いまし若もし我われが云ふ所を許ゆるきを所謂いふる一葉いつはつ

の墜落つらいらくは由りて天下の秋あきを知ると云ふこと有りて  
石いしを壁かべは是れ片小ぺんせうと云ふども之を由りて以て我  
が大墳おほのそん全体の寶石おのせきと其の古色こしきとを全ぜん了りやうし益々其の  
信然しんぜん三千八百萬人さんぱちやうまんの在り所ありて合あはせて曩なは既きふ  
所の寫真しゃしんの尊嚴そんげんと大成たいせいなるなり是は於て初めて氏  
の大腕おほのてんを全ぜんふと云ふ可まかし也氏其を壁かべは其の小片こがは  
を惜おしんで其の大体たいたいを捨すること勿なき我亦われも豪氣ごうきを  
以て之れを覓もとむるは非ひむ必竟ひつじやうして之れを覓もとむる所  
以んの理りを盡つくむる而已と云へを氏大おほひは笑わらふて云く  
我われを即すなはち大悟たいごする所あり師し其れ其の石片せきぺんを持ち行

天竺行路次第見



天竺行路次所見 卷之三  
け我れ即ち處まをる所ある可き也然しかし歸途かへりみち必かならずど人ひとを  
咎とがめらるゝこと勿なれと是こゝは於おて此こゝの大小おほいせきの二片石ふたぺんせき  
を領受うけうし得えたる也其そのの形かたちちも今爰いまこゝは糝示あはせをる者即  
ち是こゝ也

以上墳墓あふみの槩狀あきざた此こゝの如ごとし其そのの詳細まづかひのこと他日たぎ續つ  
編へんを製せいして示しを可よき也

是こゝは於おて本月このつき十一日じゅういちにち午後ごご第二時にじ「タークベンゴ」氏うぢは  
別わかれを告つげ翌あした十二日じふににち加耶かやの主人しゅじんも留中りゅうちゆうの懇到こんたうを  
謝しやうして午前ごぜん第十時じゅうじ加耶かやを發はつして「バンクボート」の方かたを  
向むかひける此こゝの回まわり「タークベンゴ」氏うぢの教しゆをよ由よしりて

大おほひは便路べんろを得えたれど路次ろじの勞苦らうくを死しりりけり午  
後ご第六時だいろくじ「バンクボート」は至いた著ちやくせり今夜こんやを取とり敢あむ  
爰こゝは一泊いつぱくをる也

翌あした十三日じふさんにち午前ごぜん第七時しちじ同所どうじよより艦車かんぐるまは乘のり午後ごご第八  
時はちじ東天竺とうてんぢくの甲谷陀かうがたの港みなとは著ちやくし「ミニセポツフェイス」ス  
トレートと云いふ街まちの「ハンマダライ」(第三番地)は投宿とうしゆく  
せり爰こゝは止とどまること六日むいっにち間日あひだ々ごと「プロキーン」と云いふ印  
度うぢの駕がは乘のりて府中ふちゆうを點見けんけんせし也此こゝの甲谷陀かうがたハ人  
民たみ凡たゞそ一百万餘いちひゃくまんご口有くちりと云いふ也然しかし人情にんぢやうの菲薄ひはくな  
る益えきし世界第一せかいだいいちと想おもはる其そのの一ひとを云いへば十じふ口くちピ



の物を二「ロピ」半或ハ三「ロピ」位位までハまけ  
也其の他ハ推テ知る可可此の甲谷陀の港港ハ付き種  
々の事状ありと云つども餘紙无無けれむ續編續編ハ送送る  
也

二十日午前第四時「オコンパニ」艦艦ハ乗乗トて甲谷  
陀の港を發發ト即ち此の河線河線を「ホグレ」河河ト名名けて鉛  
絶斯絶斯（恒河）の泓流泓流ナリ初め河中河中二三丁より起起りて五  
丁十丁遂遂ハ十里餘十里餘ハ及んで四方の眺望眺望天水茫茫天水茫茫た  
り又ハ鉛絶斯河鉛絶斯河ト是れより北藍古北藍古の方方流流きて此の  
河よりハ更更ハ大なりと云ふ也此の河を見らふ附附けて

も印度の大國大國たることと知るハ足足る也豈豈ハ獨逸の  
「エルメ」ヤ魯西亞魯西亞の「チブカ」ヤ塙斯塙斯土利土利の「トノア」河河等  
の類類ハならんや即ち甲谷陀の港より二晝夜二晝夜を経て  
漸漸く河口河口を放放きて全全く旁葛刺旁葛刺（東印度洋）ハ出出でたり  
其其より二十七日午後第十時「サイム」の「ピーナン」の  
港港ハ着着し是れより二十九日午前第九時新和蘭港新和蘭港ハ  
著著し再び歐洲通航歐洲通航の大路大路ハ出出で、是れより暹羅  
及び支那支那を経て无事无事ハ歸朝歸朝を致致したり



北畠道龍師著述目錄  
天竺行路次所見卷三 畢

北畠道龍師著述目錄

近發之部

因明入正理論與便

因明新指

此書ハ精神學物理學議事裁判等實地ニ就ク此因明ノ論方ヲ實用シ以テ世ノ識者ヲ佐ケントスルナリ

法界獨斷

世界宗教之興廢

天竺行路次所見

此書ハ師各國ヲ巡回シテ遂ニ印度ニ入ルノ路次見ル所ノ天子政府宗教人民ノ實況ヲ採載スル者ニシテ其ノ名山大川春花秋葉ノ笑墜等ノ如キハ敢テ記スルニ遑アラスト云フ

三卷 既刻

三卷

一卷

三卷

三卷 既刻



六字名義

此ノ書ハ佛教神道基督三宗ノ佛神ノ同異ヲ弁シ遂ニ人間生死ノ一往一來タル本理ヲ説明スル者ナリ

二卷

真宗真要

此ノ書ハ師自カラ以テ立ツ所ノ宗教ノ本真ヲ示ス者ナリ

前編 四卷  
後編

政治宗教對係之真理

前 六卷  
後

宗教憲法之相係

二卷

宗教兩院之相係

二卷

宗教文部之相係

二卷

宗教文明之相係

二卷

教育二方之本理

一卷

追發之部

宗教歷史

廿五卷

此ノ書初ノ十五卷ハ亞細亞宗教ノ史ニシテ后ノ十卷ハ歐洲宗教ノ史ナリト云フ

獨英墺佛小學校同異辨

一卷

宗 幼稚院義

一卷

宗 啞盲院義

一卷

宗 女學校義

一卷

陸海軍宗教必要

二卷

宗教刑場相係

二卷

印度「ヒロソヒ」辨

三卷



華天二教之裁決 二卷

唯識論新指 十卷

以上ノ著作ハ師ノ案已ニ定マル所ノ者ニシ  
テ即今我邦ノ為メニ日夜勵勉起艸ニ居ラル  
レハ追々發行之レアルベシ

明治十八年三月十九日版權免許  
同 十九年七月 出版

定價金壹圓八十錢

著述人

和歌山縣士族

北島道龍

出版人

同

北島孝夫

出版所

荒浪平治郎

東京馬喰町二丁目

島村利助

同南傳馬町壹丁目

吉川半七

大賣捌



東京淡路町

賣 同雉子町

同本郷春木町三丁目

捌 同日本橋區吳服町

同三十間堀

巖々堂

團々社支店

島村利助支店

野口愛

九春堂

大坂備後町四丁目

山村彦助

東京柳原通

田中増蔵

同心齋橋筋

松村九兵衛

同銀座四丁目

博聞社

同本町四丁目

岡島真七

名古屋玉屋町

片野東四郎

同備後町四丁目

梅原龜七

静岡江川町

廣瀬市藏

西京二條通り

若林茂助

同吳服町

青木榮次郎

同東洞院三條上

村上勘兵衛

同新通壺丁目

勝見儀助

同御幸町姉小路上

藤井孫兵衛

甲斐甲府

成島治平

同河原町通三條下

大黒屋書舗

甲府常盤町

内藤傳右衛門

同寺町四條上

田中治兵衛

信濃長野元善

西澤喜太郎

岐阜米屋町

三浦源助

同松本南深志町

高見甚左衛門

埼玉縣鴻巣駅

長島為一郎

肥後熊本新三目

長崎次郎

茨木縣水戸市泉町

川又銀藏

藝嘉廣島

早靈社

越後長岡

佐藤作平

肥前佐賀

西村萬次郎

同同

目黒十郎

阿波徳島

坂井萬吉

同新泻古町通

井筒駒吉

出雲松江

川岡清助



加賀金沢尾張町

牧野作平

藝多廣島

藤井孫兵衛

同金沢

近田太平

和歌山湊野町

野田大次郎

越中富山田町

守川吉兵衛

東海道濱松

白木健次郎

羽前鶴岡

小池藤次郎

参多豊橋

豊川堂

羽後秋田

岡田治助

東海道藤枝宿

杉山英太郎

仙臺大町

木村文助

羽前米沢

中村清兵衛

羽後秋田大町三百

本間金之助

陸奥盛岡中橋通り

澤田正助

羽前山形七日町

五十嵐太右門





